

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第236集

西 向 遺 跡

平成 21 年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第236集

西 向 遺 跡

平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

西向遺跡は、袋井市の南部（旧磐田郡浅羽町）に位置し、東側に太田川が流れる自然堤防上の遺跡です。太田川では平成6年から河川改修工事が行われ、今回の調査も改修工事に伴って行われました。

西向遺跡は最近まで周知されていませんでしたが、平成6年に二瀬東橋の付け替え工事によって、土器類が出土したことを契機に、その存在が知られることとなりました。今回の調査では、まず遺跡の広がりを確認するために、試掘調査及び確認調査を行い、その結果、以前は未周知であった太田川左岸にあらたな遺跡を確認し、大きな成果を上げることができました。この遺跡は富里遺跡として、登録され周知されることとなりました。また、右岸に位置する西向遺跡の範囲がさらに広がることが確認でき、本発掘調査では古墳時代から鎌倉時代の遺跡を確認し、集落が広がっていたことが判明しました。太田川下流域における遺跡のあり方を考える上で、貴重な資料を提供することになりました。今回の発掘調査の成果が、今後各方面で活用され、文化財に対する理解を深め、郷土の歴史を見直す一助になれば幸いです。

最後に試掘、確認調査から本書刊行まで約1年6ヶ月をかけて実施しました。その過程では、静岡県袋井土木事務所、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会、袋井市教育委員会をはじめ多くの関係機関各位、地元住民の方々に御援助と御理解を頂きました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

2011年2月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 石田 彰

例　　言

- 1 本書は、静岡県袋井市（旧磐田郡浅羽町）中地先に所在する西向遺跡の試掘・確認調査及び発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が静岡県教育委員会の指導のもと実施した。
- 3 調査期間は、以下のとおりである。

試掘・確認調査　平成21年7月23日から平成22年2月2日

本発掘調査　平成21年11月20日から平成22年7月16日

資料整理　平成22年7月6日から平成23年2月25日

- 4 調査体制は、以下のとおりである。

【平成21年度】

所長	天野 忍	次長兼総務課長	松村 亨	次長兼調査課長	及川 司
次長兼事業係長	稻葉 保幸	総務係長	山内小百合	会計係長	杉山和枝
調査課西部調査係長	富樫 孝志	調査研究員	大石祐治	常勤嘱託員	三原翔吾

【平成22年度】

所長	石田 彰	次長兼総務課長	松村 亨	次長兼調査課長	中鉢賢治
専門監査事業係長	稻葉 保幸	総務係長	嶩みやこ	会計係長	杉山和枝
調査課第4係長	富樫 孝志	常勤嘱託員	三原翔吾		

- 5 本書の執筆は、三原が担当した。
- 6 写真撮影は現地調査では三原が、遺物写真を整理技術員杉山すず代が行った。
- 7 遺構図の作成の一部を株式会社フジヤマに委託した。
- 8 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 9 本調査に関する資料は、静岡県教育委員会が保管・管理している。

凡　　例

- 1 座標は、世界測地系を用い、方位は、世界測地系による方位（座標北）を基準として表示した。
- 2 調査区は一辺10mのグリッドを設定し、東西列をアルファベットで、南北列をアラビア数字で表記し、北西隅の交点をグリッド名称とした。
- 3 土色及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』に基づいて判別した。
- 4 遺構の略号は以下の通りである。
SB（掘立柱建物跡）・SK（土坑）・SD（溝状遺構）・SP（柱穴・小穴）・SX（性格不明遺構）
- 5 遺物実測図中の●は、糸切り痕を示す。
- 6 図版の縮尺については、第1章第3節を参照されたい。
- 7 本文中で記載されている土器總年については、第3章第3節を参照されたい。

目 次

序 文

例 言

凡 例

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 発掘調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の方法と経過	1
(1) 試掘・確認調査の方法	1
(2) 試掘・確認調査の経過	2
(3) 試掘・確認調査の成果	2
(4) 本発掘調査の方法	3
(5) 本発掘調査の経過	8
第 3 節 調査報告書作成の経過	8
第 2 章 位置と環境	9
第 1 節 地理的環境	9
第 2 節 歴史的環境	9
第 3 章 調査の成果	14
第 1 節 遺跡の概要	14
第 2 節 基本層序	14
第 3 節 遺構と遺物	15
(1) 第 1 遺構面の遺構と遺物	15
(2) 第 2 遺構面の遺構と遺物	24
第 4 節 包含層・遺構外出土遺物	37
(1) 古墳時代の遺物	37
(2) 奈良時代の遺物	37
(3) 平安時代の遺物	40
(4) 中世の遺物	40
(5) その他の遺物	44
第 4 章 まとめ	48
写真図版	
報告書抄録	

写真図版目次

写真図版1

1. 遺跡遠景（北から）

4. ピット28完掘状況（南から）

5. ピット20完掘状況（東から）

写真図版2

1. 遺跡全景（北から）
2. 出土遺物集合

写真図版9

1. 4号土坑完掘状況（南から）
2. 5号土坑完掘状況（南から）
3. 6号土坑完掘状況（南から）
4. 6号土坑遺物出土状況（南から）
5. 6号土坑炭化物検出状況（南から）
6. 7号土坑完掘状況（東から）
7. 8号土坑完掘状況（東から）

写真図版3

1. 基本土層（北壁）
2. 基本土層（東壁）
3. 基本土層（南壁）

写真図版4

1. 第1遺構面調査区全景（南から）
2. 1号柱立柱建物跡完掘状況（南から）
3. 1号土坑完掘状況（東から）
4. 1号土坑遺物出土状況（東から）
5. 2号溝状遺構完掘状況（南から）

写真図版10

1. 12号溝状遺構完掘状況（南から）
2. 12号溝状遺構遺物出土状況（東から）
3. 20・21号溝状遺構完掘状況（北から）
4. 22号溝状遺構完掘状況（東から）
5. 1号性格不明遺構遺物出土状況（南から）

写真図版5

1. 1号溝状遺構完掘状況（南から）
2. 1号溝状遺構遺物出土状況（北から）
3. 3号溝状遺構完掘状況（南から）

写真図版11

1. 出土遺物(1) 土器

写真図版6

1. 3号溝状遺構遺物出土状況(1)（南から）
2. 3号溝状遺構遺物出土状況(2)（南から）
3. 土器集中1検出状況（南から）

写真図版13

1. 出土遺物(3) 土器

写真図版7

1. 第2遺構面調査区全景（北から）
2. 2・3号柱立柱建物跡完掘状況（西から）

写真図版14

1. 出土遺物(4) 土器・埴輪

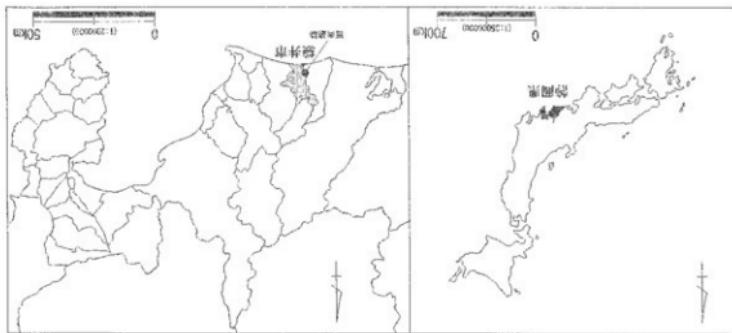
写真図版8

1. 4号柱立柱建物跡完掘状況（北から）
2. ピット14・16～19完掘状況（南東から）
3. ピット21～25完掘状況（南東から）

写真図版15

1. 出土遺物(5) 土器
2. 出土遺物(6) 青磁・白磁
3. 出土遺物(7) 磁石・鐵鏃・羽口
4. 出土遺物(8) SD3出土貝類

第1图 测绘位置图



第1表 地理要素一覧表 12
第2表 出土地點一覧表 49~51

地圖目次

- 第1图 测绘位置图 1
第2图 测绘面調查区全体图 2
第3图 調査区N°97のE配置圖 3
第4图 1・3区域外配置圖 4
第20图 SK3・4・6～8実測圖 27
第5图 1区土壤缺缺圖(1) 5
第22图 SD12実測圖 31
第6图 1区土壤缺缺圖(2) 6
第23图 SD13・17実測圖 32
第7图 3区土壤缺缺圖 7
第24图 第2土壤面調查(2號)合4圖解 10
第9图 地理要素位置圖 11
第25图 SD16・19・20・21・SX3実測圖 33
第10图 基本土圖 15
第26图 SD22・SX1実測圖 34
第11图 第1土壤面調查全体圖 16
第12图 SK1・SK1・SD2実測圖 18
第13图 SD1実測圖 19
第28图 包含單出土遺物(1) 36
第14图 SD3実測圖 20
第29图 包含單出土遺物(2) 39
第15图 土器集中1実測圖 21
第30图 包含單出土遺物(3) 41
第16图 SP1・SD1・3・SK1 43
第17图 SD3・土器集中1 45
第33图 包含單出土遺物(6) 46
第32图 包含單出土遺物(5) 46
第31图 包含單出土遺物(4) 47
第34图 包含單出土遺物(7) 47

地圖目次

第1章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

近年、太田川上流域での大規模な開発が保水量の減少をうみ、増水時の下流域住民の安全確保が困難となっている。この問題を解決するために、本遠跡の東側を貢流する太田川では、静岡県袋井土木事務所（以下、袋井土木事務所と略称）によって河川改修工事が実施されている。改修工事に伴い、元島遺跡、西向遺跡1次調査の本調査がすでに実施され、低湿地での遠跡の存在やその調査成果等が明らかになっている。

上記の事業に引き続き平成21年度に実施される予定であった工事範囲は、二瀬西橋から南方400mまでと和口橋を中心南北700mを範囲としていた。袋井土木事務所は、工事に先立ち埋蔵文化財の所在の有無を静岡県教育委員会（以下、県教育委員会と略称）に照会された。県教育委員会は、工事範囲が西向遺跡の埋蔵文化財包蔵地に含まれ、和口橋付近もその周辺に位置していることを回答した。

この回答により袋井土木事務所は県教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議に入り、本発掘調査が必要と判断された。その後、県教育委員会から本研究所に調査依頼の打診があり、袋井土木事務所と県教育委員会、本研究所が期間と調査範囲等について協議を行い、三者の合意により調査を実施することとなった。

はじめに遺跡の範囲を確定するため、平成21年7月23日から平成22年2月2日にかけて、太田川両岸にわたる調査対象面積55,000m²に試掘・確認調査を行った。試掘・確認調査を受けて、平成21年11月20日から平成22年7月16日まで、調査面積2,550m²を対象に本発掘調査を行った。

第2節 調査の方法と経過

① 試掘・確認調査の方法

確認調査対象地は、太田川両岸に渡っていたため右岸を1区、左岸を3区と呼称することとした。1区はさらに、ローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを付し便宜上調査区を分割した。また、試掘坑（TPと略称）の番号は、1区については北西隅から、3区は掘削した順にアラビア数字を付しその名称とし、例えば1区TPⅡ-1のように呼称することとした。なお、確認調査前に太田川・原野谷川間の中州を2区と呼称し調査予定であったが、今年度は試掘・確認調査を行わないことが決定されたため、欠番とした。

調査は、5m四方の試掘坑を設定し、重機に平爪を装着し慎重に掘削した。遺構または遺物を検出した場合は、精査、写真撮影、遺物取り上げ作業を順に行い、重機の掘削土中に遺物が含まれていないかも併せて確認した。また、遺構が包含層上面で確認できた場合は、重機で掘削せずに残し、その周辺を直線で振り下げて、下層の確認作業を行った。なおテストピットは基本的に5m四方に設定したが、調査中に壁面の崩落防止のために間口を一部7m四方（1区Ⅲ-1～55）へ変更した。

掘削終了時には土層断面図を作成し、土色・含有物を記録し、併せて土層断面の写真撮影を行った。出土遺物は出土層位を把握するに留め、個々に出土地点を記録していない。最後に試掘坑掘削土を堆め戻し、これら上記作業を順に繰り返し行っていた。試掘坑は1区で65ヵ所、3区で35ヵ所の計100ヵ所を調査した。

写真撮影には、35mmカラーネガフィルム・カラーポジフィルムを使用し、メモ写真用にコンパクトデジタルカメラを用いた。試掘坑の平面図作成には、トータルステーションを用い記録し、株式会社フジヤマに図面作成を委託した。

(2) 試掘・確認調査の経過

7月23日に袋井土木事務所との契約を締結し、同月29日に再度、調査範囲や工程、日程等について協議を行い、調査開始とした。7月29日から11月9日まで基本的に1日2カ所の試掘坑を掘削。調査し、太田川払堤工事との兼ね合いから、1区と3区を行き来しながらの調査であった。11月9日には、遺跡の範囲や堆積状況の確認ができ、調査を終了することとした。同日に重機を搬出し、翌日10日に倉庫や仮設トイレを撤去し、すべての調査工程を終了した。11月11日から試掘・確認調査結果概要資料を作成し、30日にその成果を県教育委員会へ報告した。2月2日に契約が満了し、事業を終了した。

(3) 試掘・確認調査の成果（第4図）

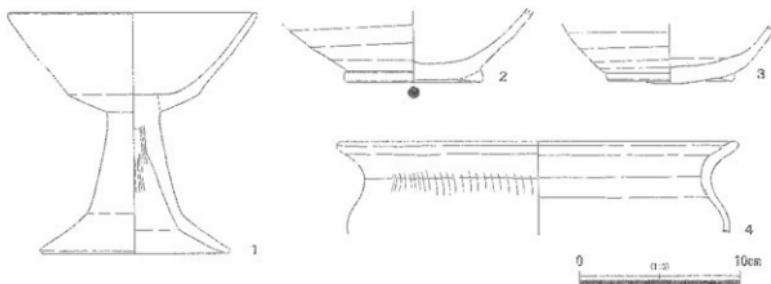
先述したとおり試掘坑は1区で65カ所、3区で35カ所の調査を行った。以下、各地区の土層堆積状況・遺物出土状況について概要を記述していく。

1区（第5・6図） 65カ所のうち43カ所で遺構または遺物を確認した。1区は調査対象地のほぼすべての範囲で遺構ないし遺物が出土しており、南北340mに渡って遺跡が広がることが判明した。遺物の出土量は調査対象地西側で多く、また遺物包含層は西から東へ向かって緩やかに傾斜していた。基盤層となるX層も同様な地形がみられた。

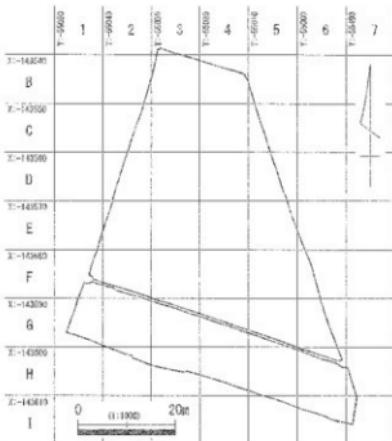
遺物包含層は4層確認でき、VI・VII層が古代～中世前半、VIII・IX層が古墳時代中期～後期・終末期を主とすることが出土遺物から比定できる。VII層は遺跡全体に広がり、IX層は東半部に確認できた。また灰白色粘土層が一部の試掘坑で確認でき、地山が流出して堆積したものと考えられる。調査対象地北側や南側では、遺構・遺物の出土量は比較的少なく、中央部で多い。また、中央部では2または3遺構面が確認できた。検出した遺構は土坑、溝状遺構、柱穴・小穴で、古墳時代の住居跡や墳墓は検出していない。

1区出土遺物（第2図） 1は土師器高杯で、器面全面が磨滅している。脚部内面に棒状工具によるナデが認められ、杯部との接合部には粘土を充填している。II期に比定でき（松井 1992）、5世紀後半に位置付けられる。2は山茶碗である。高台は低く潰れ、底部とほぼ水平となっている。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗である。山茶碗II期-1に比定できよう。3は山茶碗である。高台は低く扁平で底部が高台より下方へ突出し、丸底気味である。胎土からみて湖西・渥美型山茶碗である。山茶碗II期-1に比定できよう。4は土師器長周甕である。頸部にハケ目が認められる。

なお、1・3はTP II-6、2はTP III-2、4はTP III-1から出土した。



第2図 1区試掘坑出土遺物



第3図 調査区グリッド配図

3区（第7図）35カ所のうち10カ所で遺構または遺物を検出した。和口橋以北では遺構・遺物は検出できず、山茶碗小片がTP7の上層より1点出土しただけで、上流域から流出したものと考える。また、和口橋以北に設定したTP1では、1m程度の礫層が確認でき、旧原野谷川の支流が和口橋付近を蛇行しながら流れていたことが推定できる。

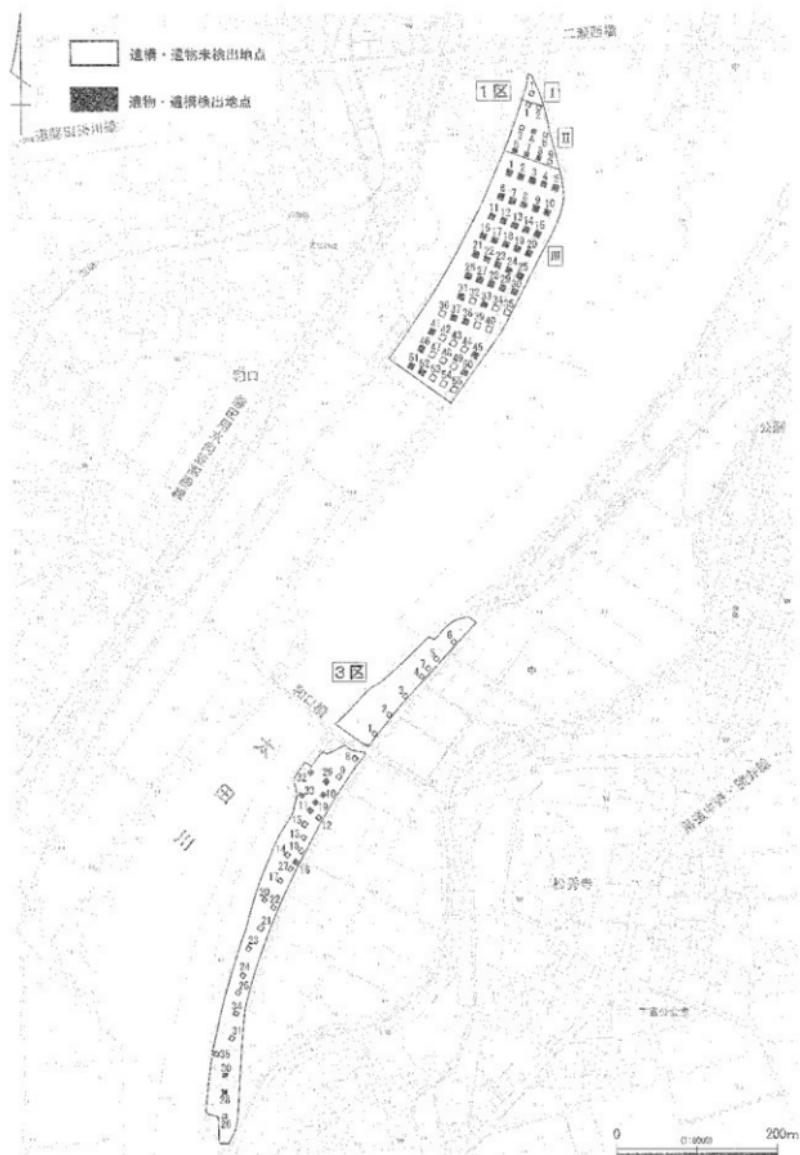
遺物包含層は、調査対象地中央部と南端部で土質が異なるが、いずれも2層を確認した。中央部（TP9・10・32・33）では1区と同様に、古代から中世前半と古墳時代中期を主体とする時期の土層である。南端部（TP28・30）では中世の遺物のみ確認でき、古代以前の遺物は出土しなかった。また、3区TP16は調査対象地中央部に位置し、古代の須恵器等が出土したが、その標高は3区中央部の包含層より0.6から1m下がっており、何らかの落ち込みがあった可能性が高い。調査終了後にこの結果を受けて、3区は富里遺跡として遺跡登録された。

（4）本発掘調査の方法（第3図）

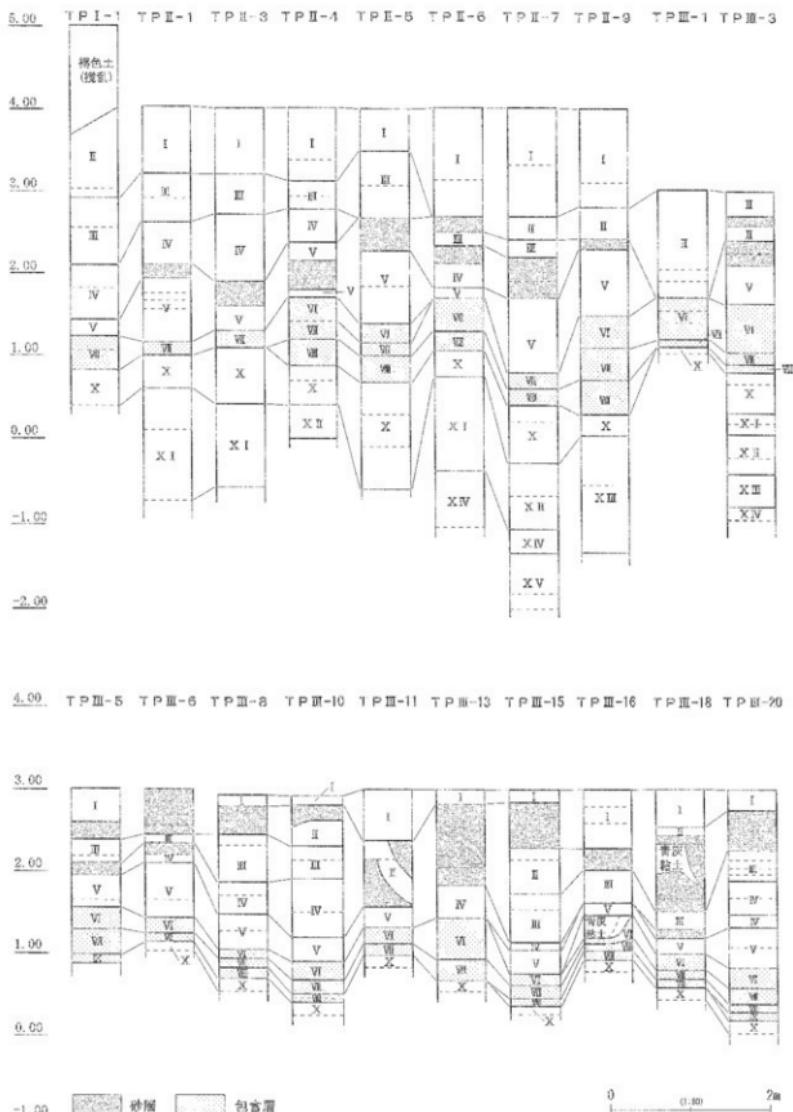
確認調査の結果を受け、西向遺跡の調査対象面積は約30,000m²となった。袋井土木事務所より1区北端部から調査を進めて欲しいとの依頼があったため、1区で遺物包含層を確認した1区TP II-3を北西端部とし、そこから1,800m²の調査区を設定した。調査が進行した段階で、さらに調査区を南側へ拡張し、調査面積を2,550m²とした。表土除去は重機で行い、平爪を装着し包含層上面まで掘削した。排水はクローラーダンプにより調査区外へ搬出し、仮置きした。

表土除去後は、調査区に世界溝地系に基づいて一辺10mのグリッドを設定し、これらを使用して地形や遺構の測量、出土遺物の取り上げ作業を行った。遺構掘削の際には、土層帯を設け、遺構覆土の堆積状況を確認し、縮尺1/20で土層断面図を作成した。また、第1遺構面では1m間隔で標高を測量・記録し、第2遺構面では写真測量により10cm間隔でコンター図を作成した。

写真撮影には、6×7版モノクロームフィルムを主に使用し、補足として35mmカラーネガフィルム・カラーポジフィルムを、メモ写真用にコンパクトデジタルカメラを用いた。全景写真には4×5版カ

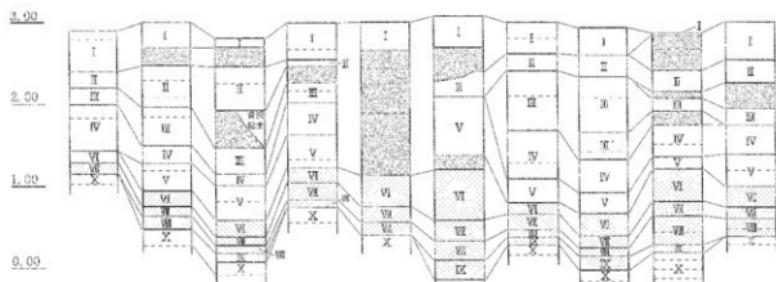


第4圖 1·3段試掘坑剖面圖

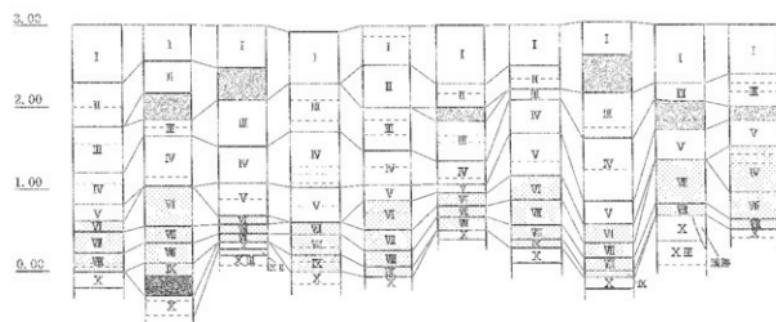


第5図 1区土層柱状図(1)

4.00 TP III-21 TP III-23 TP III-25 TP III-26 TP III-28 TP III-30 TP III-31 TP III-33 TP III-35 TP III-36



4.00 TP III-38 TP III-40 TP III-41 TP III-43 TP III-45 TP III-46 TP III-48 TP III-50 TP III-51 TP III-52



4.00 TP III-55

- 〔1区〕
- I 棕色土
 - II 青灰化變土
 - III 黑灰色～暗黃灰色粘土
(褐色含心)
 - IV 暗青灰色粘土
 - V 明青灰色粘土
 - VI 青灰色砂質土
 - VII 亂色粘土
 - VIII 暗灰化粘土
 - IX 灰色粘土
 - X 灰黑色粘土
 - XI 灰白色粘土
 - XII 青灰色粘土
(黑色粘土含心)
 - XIII 暗灰色粘土
 - XIV 灰白色粘土
 - XV 灰黑色粘土

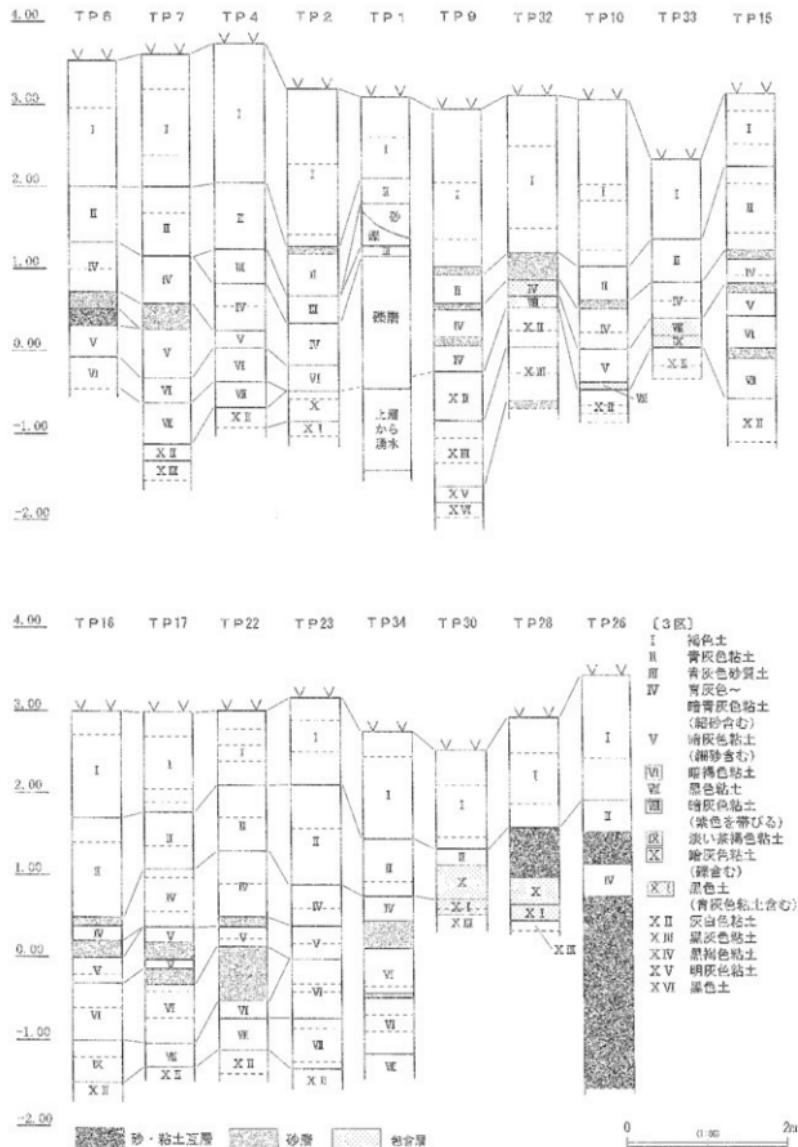
砂・粘土互層

砂層

包含層

0 (0.6m) 2m

第6図 1区土層柱状図(2)



第7図 3区土柱状図

ラーポジフィルム・モノクロームフィルムを使用した。また、出土遺物の洗浄・注記作業、写真・図面整理事業は現地作業と並行して実施した。

(5) 本発掘調査の経過

11月20日に役井土木事務所と本研究所との契約を終結し、同月30日に期間・調査範囲・堆土の処置等について協議を行った。12月4日から作業員用コンテナや備品等の搬入などの調査準備にとりかかり、これらと並行して、表土除去作業も開始した。12月16日から人力による作業を開始し、調査区周間に排水溝を掘削することから始め、順次包含層上層の掘削、第1遺構面検出遺構の調査、包含層下層の掘削と進めていった。3月29日には包含層下層の掘削まで終了していたが、南側へ調査区を拡張することとなり、4月5日から4月14日まで調査区拡張部の表土除去作業を行った。

4月15日から人力での調査を再開し、第2遺構面検出遺構の調査、調査区拡張部の包含層上層掘削作業を行った。包含層上層の掘削と並行して、拡張部第1遺構面の調査を進め、5月28日までに第1遺構面の調査を終了した。引き続いて、拡張部包含層中・下層の掘削、拡張部第2遺構面の調査を6月11日まで行い、調査は全景写真を残すだけとなった。その後、降雨が続き全景写真や写真測量が実施できなかったため、作業を中断し洗浄・注記作業などを進めた。翌月7日から9日にかけて調査区全体の清掃・写真撮影、写真測量を行い、調査を終了した。

第3章 調査報告書作成の経過

7月5日に出土品や図面・写真類を島田整理事務所へ搬入し、同月6日から作業を開始した。はじめに遺物の分類・接合作業等を行い、同月26日から順次、遺物実測作業を進めた。接合作業が終了した7月27日から復元作業を実測作業と並行して進め、実測作業は9月14日まで行った。

8月19日から遺構写真版組、遺構図面版組、観察表作成、遺物・遺構トレース作業を順に行い、これらの作業が10月13日までに終了した。

10月14日から図面纏集、削付作業を行い、10月28日までにすべての作業を実施し、見直し・図版の点検等を行い、11月11に入稿した。整理事業は島田整理事務所で実施し、遺物写真撮影は9月25日から9月27日まで本研究所本部にて行った。

なお本書に掲載した遺構・遺物の実測図面は、以下のように縮尺を統一した。

遺物実測図 1/3 調査区全体図 1/400 SD1・3・22全体実測図 1/200 または 1/400

遺構実測図 1/40 または 1/60 出土状況図 1/40 遺構実測図内の遺物実測図 1/10

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境（写真図版1）

西向遺跡は、袋井市（旧磐田郡浅羽町）中の太田川河川敷内に所在し、袋井駅から約5km、磐田駅から約4kmの位置にある。袋井市は、北に周智郡森町、東に掛川市、西に磐田市と接し、総面積は198.56haである。市内には太田川・原野谷川が縱断し遠州灘へ注ぎ、それらに堆を発する小潤川が貢流している。また、北東に小笠山丘陵、北西に磐田原台地などの中・高位段丘が位置する。遺跡周辺は粘土・泥炭層など有機質を多量に含む土、河川による礫層などが堆積する軟弱な地盤である。

本遺跡は磐田市と袋井市の市境を流れる太田川と春塩山から南流する原野谷川の合流地右岸に所在し、磐南平野の東部にあたる。磐南平野は海面の変動によって形成された砂堤列により、稻田・浅羽地域等にあった入江が閉塞し生まれ、潟湖・後背湿地を形成した。そこに旧原野谷川・旧太田川が流れ込み自然堤防が成立した（加藤 1993）。砂堤列は遠州灘の海岸沿いや国道150号線とその北側900mの地点にあり、柴田稔氏はこの砂堤列を7~8列に区分できるとしている（柴田 1987）。

本遺跡の周辺に位置する遺跡は、このような居住や生産活動に適した地を占地しており、自然環境とのつながりが注目・特徴づけられる遺跡である。

第2節 歴史的環境（第9図）

本遺跡と関係の深い古墳時代から中世を中心に、西向遺跡周辺で調査されている遺跡を紹介しておきたい。

古墳時代 当該期の集落は、浅羽地域で十二所遺跡（9）・古新田遺跡（11）・新堀遺跡（17）・脇木遺跡（18）、福田地域で元島遺跡（39）が調査され、各遺跡は自然堤防や段丘などの微高地に位置する。ただ、北野遺跡（22）のように潟湖の周囲で低地となる場所に遺跡が所在している場合もあり、潟湖との関係が注目されている（山本 2000）。古墳や古墳群も、多くは磐田原台地と小笠山丘陵に立地しているが、法音庵古墳（20）は浅羽地域西部の砂堤列に位置している。

磐田原台地南東部での古墳の初現は、松林山1号墳（30）・経塚古墳（27、達城寺8号墳）である。その後、前期末までに前方後円墳である鶯荷山古墳（達城寺6号墳）、大型円墳の秋葉山古墳（達城寺7号墳）・高根山古墳（31）などが築かれ、大首長墓がこの地に濃密に分布している。また、中期中葉から末葉頃には磐田原台地には堂山古墳（37）が、小笠山丘陵には遠江地域最大の方墳五ヶ山B2号墳（13）や前方後円墳である五ヶ山B1号墳、貴名地B2号墳（12）など豊富な副葬品をもつ古墳が相次いで築造されている。五ヶ山B2号墳の被葬者は磐田原台地西縁の堂山古墳の被葬者を支えた人物であると評価されている。

後期には、横穴式石室墳の櫛塚古墳（25）や竪穴式横穴式石室をもつ大門大塚古墳（4）が出現し、新たな葬制を伴った墓制が当該地域にも波及する。また、後期古墳で特に注目されるのは、小笠山丘陵に横穴式木室という特異な主体部をもつ团子塚古墳群（8）や北山古墳群（7）が分布することである。これらの古墳の被葬者は須恵器生産や小銀治に携わる渡来系氏族との関連も指摘されている。

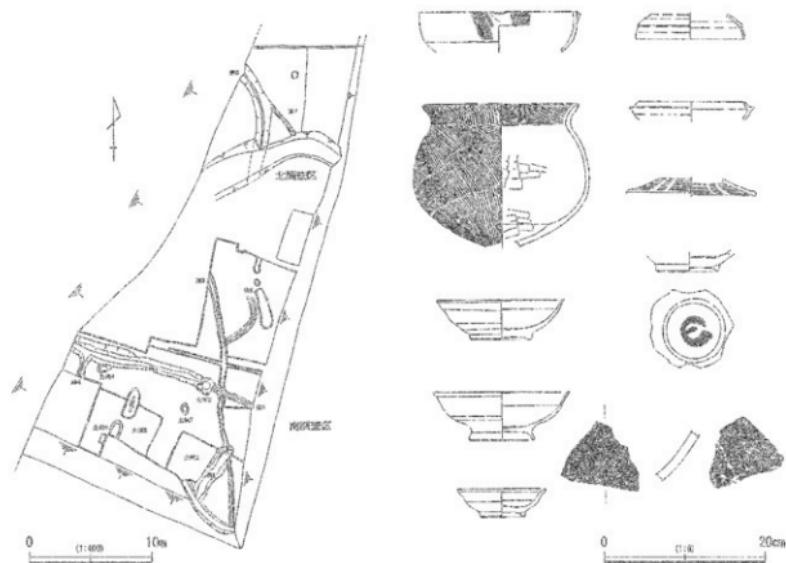
集落遺跡では、新堀遺跡・古新田遺跡が注目できる。新堀遺跡では、住居と土器廐棄土坑が検出され、前期の一括資料が得られている。土坑内には充形の土器、手づくり土器、勾玉、铁鎌や炭化物が出土しており、前期の儀礼行為が窺える。また、当遺跡ではS字口縁の台付甕や山陰系甕が出土し、他地域との交流を看取できる。

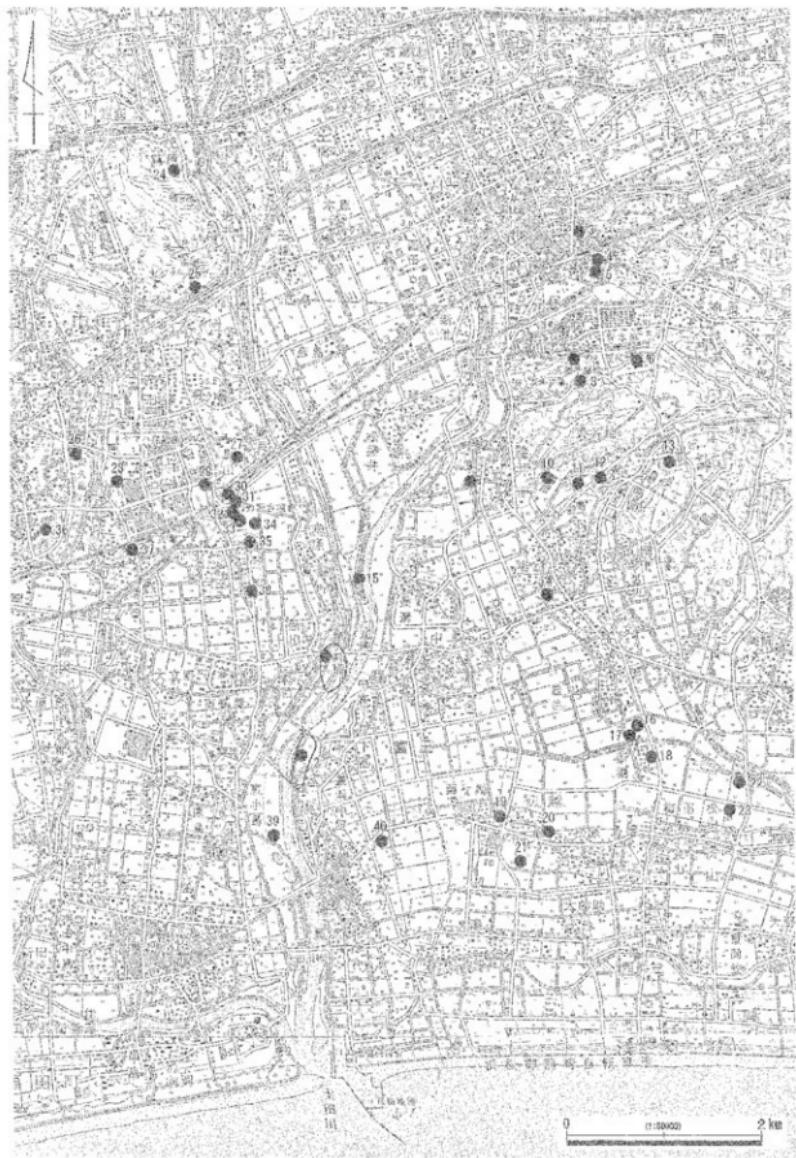
古新田遺跡では「コ」の字状配置の掘立柱建物跡や「ロ」の字状配置の倉庫跡など地域首長の主館や居館などが検出され、一般的に出土量の少ない5世紀代の須恵器も多く出土している。また元鳥遺跡や北野遺跡でも多量の須恵器が出土する。一般的な集落跡は古新田遺跡のように面的に調査されている例に乏しいが、格段の差があることが推測される。古新田遺跡が営まれていた中期中頃以降には、磐田原台地東南部に築かれていた大型古墳が減少し、以前の偏在的な大型古墳分布が看取できなくなる。一方で天竜川流域や原野谷川流域での大型古墳の分布が相対的に多くなる傾向にある。

浅羽地域を囲うように位置する磐田原台地と小笠山丘陵には、大官長墓やそれに準ずる古墳が濃密に分布し、これらの被葬者が眼前にみえる湯瀬を含む領域やそれに伴う交易などを支配していたと考えられる。

古代 律令制下では静岡県西部は遠江国に属していたが、遺跡が位置する浅羽地域がどの郡に属していくかは、長下郡または山名郡であるという二つの意見があり明確でない。長下郡は長田郡から、山名郡は佐益郡（後に佐野郡へ改称）から分かれて立郡している。「和妙類聚抄」には長下郡に、太田・長野・賀名・伊筑・幡多・大根・老馬・通誤の8郷が、山名郡に山名・金田・宇智・信盛・萩戸・久努の6郷が、佐野郡には山口・小松・邑代・幡屋・日根がみえる。現在の地名として残っている所は少なく、郷名からもその比定地は判然としていない。

一方、小笠山丘陵北方の坂尻遺跡から「佐野屬家」、「釋長」、「日根麻家」、新堀遺跡からは「山名屬」などの墨書き土器が出土し、掛之上遺跡（3）からは大型の柱穴をもつ總柱建物跡などが検出されている。考古学的調査では、墨書き土器・遺構の存在から坂尻遺跡は佐野郡家、掛之上遺跡・新堀遺跡は山名郡家またはその出先據間に比定できる可能性が指摘されている。また、本遺跡の北西に位置する鎌田・鏡影





第9図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	県番号	遺跡名	時期	内 容
1	-	西 向 遺 跡	古墳～中世	本報告書所収。
2	-	富 裏 遺 跡	古墳～中世	試掘・確認調査対象地。本報告書所収。
3	151	掛 之 上 遺 跡	縄文～近世	液族居跡か。山名郡家推定地。
4	159	大 門 大 墳 古 墳	古墳	斐穴系複穴式石室をもつ古墳。6世紀中頃。
5	157	大 門 遺 跡	縄文～近世	弥生時代中期から後期の方形周溝墓、集落跡。
6	194	高 尾 山 古 墳 群	古墳	前方後円墳を含む古墳9基からなる古墳群。
7	4	北 山 A 古 墳 群	古墳	横穴式石室墳を含む4～7基程度の群集墳。古墳時代後期。
8	6	園子塚 C 古 墳 群	古墳	円墳5基、小石室5基からなる古墳群。複穴式石室墓含む。
9	14	十 二 所 遺 跡	弥生・古墳・中世	弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡。
10	17	實 名 地 遺 跡	古墳・中世	古墳時代前期の無濠跡、方形周溝墓。
11	45	古 新 田 遺 跡	古墳	古墳時代後期の豪族宅宅。
12	18	實名地 B 古 墳 群	古墳	前方後円墳を含む5基からなる古墳群。
13	19	五ヶ山 B 2 号 墓	古墳	34m×29mの方墳。甲冑・盾等出土。古墳時代中期。
14	23	若 宮 遺 跡	弥生・中世	散布地。
15	-	長 沿 中 島 遺 跡	中世	12・13世紀の短期間の集落跡。
16	30	北 ハ サ マ 遺 跡	弥生・古代～中世	奈良時代～中世の集落跡。
17	-	新 堀 遺 跡	古墳～鎌倉	「山名堀」墨書き土器出土。山名郡家推定地。
18	31	青 木 遺 跡	弥生・古墳・中世	弥生時代から継続的に營まれている集落跡。
19	39	相 馬 遺 跡	古代・中世	散布地。
20	40	捷 音 福 古 墳	古墳	直径20mの円墳。5世紀末から6世紀初頭。
21	43	樺 現 山 遺 跡	弥生・中世	弥生時代から中世の集落跡。
22	-	北 野 遺 跡	古墳・近世	古墳時代後期の集落跡、大森。TK10型式並行期。
23	-	宮 齋 遺 跡	古代・近世	古墳時代前期の集落跡。
24	154	峰 原 中 世 墓	古墳・中世・近世	
25	161	瓢 坂 古 墳 群	古墳	瀬江地塊最古の横穴式石室墳を含む4基からなる古墳群。
26	192	安 久 路 古 墓	古墳	須恵器墓跡。MT15型式並行期。
27	176	連 城 安 古 墓 群	古墳	椎原山・瀬江や藤原古墳を含む8基からなる古墳群。
28	188	安 久 路 古 墓 群	古墳	安久路丸山古墳(直徑47m)を中心に3基からなる古墳群。
29	180	大 原 墓 墓 群	中世	中・近世の墳墓群。宝蓋印塔・五輪塔出土。
30	178	松 林 山 古 墓	古墳	全長約107mの前方後円墳。埴輪・三角錐神試繩など出土。
31	181	高 横 山 古 墓	古墳	直徑35mの円墳。埴輪出土。古墳時代中期初頭。
32	182	伴 規 古 墓 群	古墳	高横山古墳を含む現存6基からなる古墳群。
33	183	兎 山 古 墓 群	古墳	円墳3基からなる古墳群。
34	184	御 堂 山 古 墓	古墳	現状は確認できない。古墳時代後期後半。
35	185	八 王 子 古 墓 群	古墳	円墳7基からなる古墳群。
36	226	城 之 崎 A 古 墓 群	古墳	直徑60mの円墳城之崎丸山古墳を含む2基からなる古墳群。
37	189	堂 山 古 墓 群	古墳	前方後円墳を含む6基からなる古墳群。
38	186	銀 田 - 銀 影 遺 跡	弥生～中世	八波瀬舟運轍車軸丸瓦出土、寺院跡。
39	2	元 島 遺 跡	弥生～近世	弥生時代から近世の集落跡。近世の漁港跡点。
40	1	堀 口 遺 跡	古墳	散布地。

ゴシック体は本報告書所収

遺跡（38）では、「大草」・「草守」墨書き器が出土しており、寺院が付近に所在する可能性が高い。調査の進展とともに古代の様相が明らかになりつつある。

中世 当該期には、本遺跡周辺に国衙領、神宮領の鎌田御厨、親学院領浅羽莊が旧太田川・原野谷川を境に分布し、浅羽莊は諸井以南に広がる広大な莊域を有していた。国衙領の実態については記録がほとんどなく、その詳細は不明であるが、西向遺跡の範囲は国衙領に含まれる。

本遺跡の500m北方に12世紀後半に比定されている長溝中島遺跡（15）が所在し、国衙領長溝郷に開連する遺跡で、貿易陶磁・瓦器碗などが出土したことから物資の流通拠点であることが指摘され（山本 2001）、本遺跡もその立地から長溝中島遺跡との関連が指摘される。西向遺跡1次調査（山本 2003）では、12世紀代を中心とする集落が検出され、本遺跡と類似する様相である。周辺の遺跡を概観すると、浅羽低地には北ハサマ遺跡（16）が所在し、柵列による区画を伴う獨立柱建物跡が検出され、滑ヶ谷窯跡群の興盛と窯物跡の整備状況が合致することから、同窯跡群との関連が指摘されている。また、十二所居館では、溝を伴う幅5～6mの土塁が検出されている。遺跡の周辺は当時、荒野山領の山名庄諸井郷であり、莊園支配の居館跡ではないかと推定されている。

いずれの時代も多くの遺跡が高乾地を意識しながら生活・居住し、また、河川や海潮を通して物資の交易・流通や他地域との交流を行っていた姿を想起できよう。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要（写真図版2）

本遺跡では、掘立柱建物跡4棟、柱穴・小穴38基、土坑8基、溝状遺構21条、性格不明遺構3基、土器集中1カ所を検出し、2つの遺構面を確認した。

第1遺構面は、8世紀中頃～13世紀後半代に比定でき、12世紀代を主体としている。検出した遺構は少なく、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝状遺構3条、土器集中1カ所である。遺構面は標高0.8～1.3mで、西から東へ傾斜し、西南部は微高地状となっていた。この微高地に遺構が所在した。

第2遺構面は、5～7世紀中頃に比定でき、5世紀後半代を主体としているが、遺構に伴う遺物は少なく、出土したとしても小破片で遺構の年代を直接比定することは困難であった。検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟、柱穴・小穴38基、土坑7基、溝状遺構18条、性格不明遺構3基である。遺構面は標高0.3～1.0mであるが、検出した土坑などでは遺構底面は海拔0m以下となる部分もある。溝状遺構は概ね真北を意識して掘削されていた。

出土遺物のはばすべてが土器・陶磁器類であるが、包含層から砥石2点、羽口1点、鉄滓4点も出土している。出土遺物を正確に計量していないが、古墳時代・古代の土師器や中世の土鍋類がテンパコ9箱、須恵器・灰釉陶器・山茶碗が11箱出土した。前者は小破片が多く器種分類が困難だが、器形の分かるもので判断すれば中世の土鍋類は少量で土師器が多く、その中でも窓坏が目立つ傾向にある。後者に関しては、山茶碗が須恵器や灰釉陶器の約5倍程度の出土量である。山茶碗の多くは湖西・渥美型山茶碗で、東造型や尾袋型、北部系の山茶碗も確認できる。また常滑古窯群や渥美古窯群などで生産された中世陶器、舶載の貿易陶磁5点も出土している。つまり古墳時代・古代の土師器と山茶碗がほぼ同量、須恵器・灰釉陶器がその約5分の1、土師質土器や貿易陶磁は数える程度である。

なお3号溝状遺構上層からは厚さ約5cm、長軸0.8mの貝層（ヤマトシジミ）を検出している。

第2節 基本層序（第10図、写真図版3）

本遺跡西側に設けられている廣道は、現地表面で標高約5mを測る。試溝・確認調査着手以前に、河川改修工事に伴い土取り工事があり、現地表面から1～2mの堆積土を除去していた。この土取り工事の立会の際には、排水溝が調査区を横断するように埋設されており、水田や耕地が広がっていたと考えられる。このような水田などの耕作地は、土取り工事によって削平された。

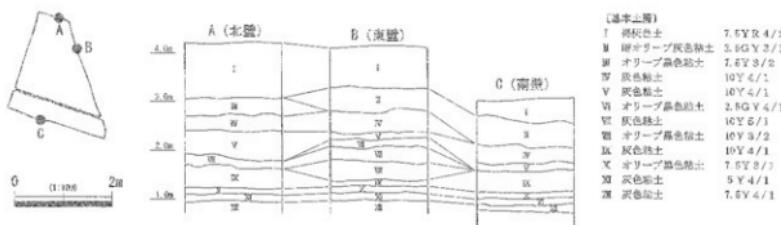
本遺跡での堆積土は、第2章地理的環境で記述したように、河川の堆積物で構成されており、粘土・砂質土を主体として若干の礫や炭化物を含み、I層以下は還元土層であった。基本土層は調査区の北・東・南壁に設定し、3m幅で土層断面図を作成した。包含層以上の表土は複雑な堆積を成していたが、基本土層を設定した地点では8層、包含層は南東方向に傾斜するように堆積し、3層（IX・X・XI層）認められた。ただ、調査区の西半部では包含層が2層（IX・X層）のみ堆積しており、XI層が認められなかった部分もある。

遺構は、X層上面とXI層上面（基盤層）で確認しており、包含層出土遺物から前者が8世紀中頃～13世紀後半、後者が5～7世紀中頃に比定でき、出土土器から7世紀末葉～8世紀前半は空白期間となる可能性が高い。X層は南西部で厚く堆積しており、調査区南西部は微高地状となり、この上に遺構が確認できた。また、基盤となるXI層は、北西から南東に向かって傾斜していた。以下、層位毎に堆積状況を概観する。

I・II層を色調により区分したがどちらも砂質土であり、グライ化の差異によって生じている。I層とII層の境はいずれの土層断面でも標高2.5~3mにある。

II層以下包含層までは、粘土と砂質土がほぼ互層をなす形で堆積しており、土壌の安定と河川の堆積が交互に行われていたことが推測できる。包含層以下には砂質土は含まれていなかったが、北壁ではIX層上面が砂質土により浸食されており、河川の氾濫があったことが推測できる。東・南壁では包含層直上ではなく、砂質土との間に粘土層を挟んでいる。

基盤となるXII層は灰白色またはやや黄灰色を帯びる灰白色粘土で、表土や包含層との土色の差が明瞭である。灰白色粘土は海成粘土だと考えられ、その生成要因は遺跡周辺が入江になっていたことと関係している。



第19図 基本土壠図

第3節 遺構と遺物

(1) 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面の遺構 (第11~15図、写真図版4-1)

掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝状遺構3条、土器集中1カ所を検出した。第1遺構面直上に堆積していた包含層(埴層)からは、古墳時代土師器・須恵器と山茶碗が混在して出土している。第1遺構面の下限は、山茶碗小皿から13世紀後半頃に求められる。以下、各遺構の詳細を記述していく。

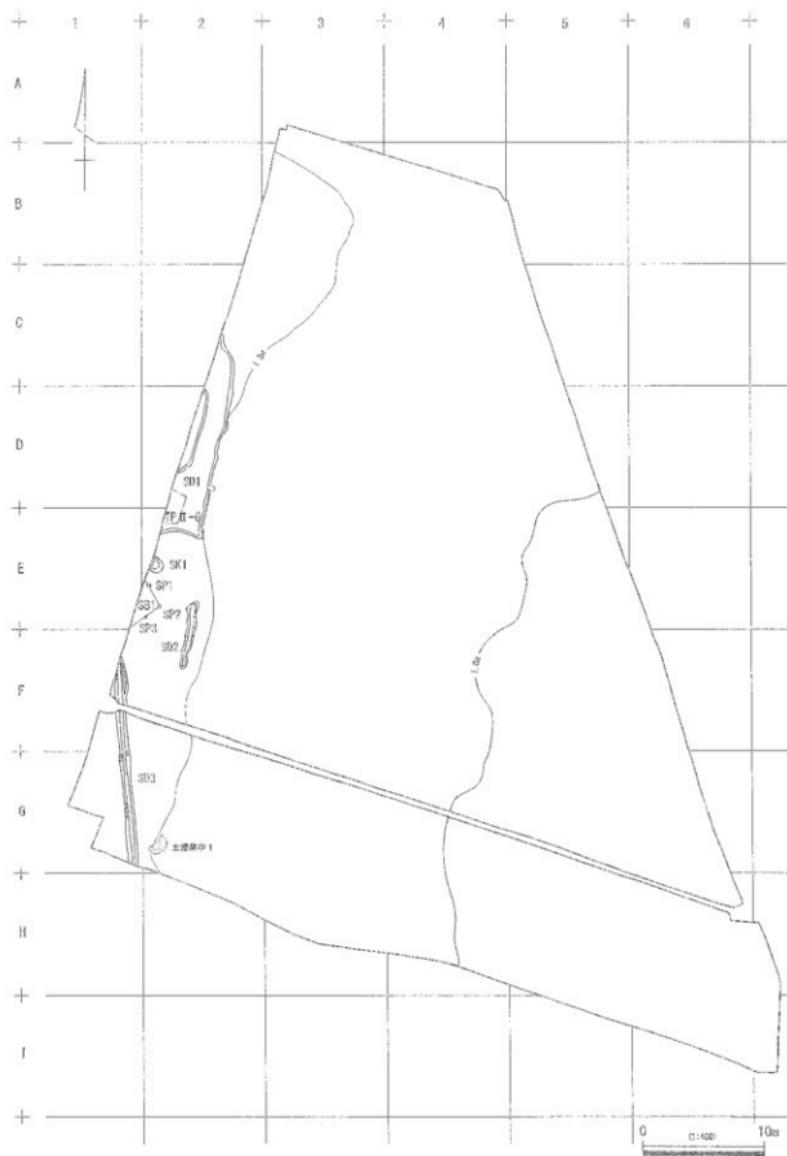
なお時期比定は、古墳時代の土師器を松井一明氏の遼江地域須恵器・土師器編年(松井 1992)に、古墳時代の須恵器・古代の須恵器・土師器を鈴木敏則氏の土師器・須恵器編年(鈴木 1998・2004)に基づいている。また、丸杉俊一郎氏の井通遺跡の編年(丸杉 2007)も参考にした。

灰釉陶器・山茶碗は基本的に松井氏の灰釉陶器・山茶碗編年(松井 1989)に準拠するが、產地の同定ができた場合には各窯跡群での縦年を使用した(中野 1994・藤沢 2008)。

1号掘立柱建物跡 [SB1] (第12図、写真図版4-2)

E-2グリッドに位置し、調査区西線と接している。柱跡が整わず、遺構全体を把握できないため判然としないが、掘立柱建物跡であると判断した。SP1とSP2の中心線の方向はN-29°-Wである。柱間寸法は南北に1.88m、東西に1.42mを測る。柱穴は直径0.2~0.28mで、円形を呈す。深さは最深部で0.38mである。

SP1裏土中層から正置の状態で山茶碗1点、下層から山茶碗1点が出土した。山茶碗Ⅲ期-1に比定でき、12世紀末~13世紀前半に位置づけられる。当該期まで機能していたと考えられる。



第11図 第1排水面調査区全体図

1号土坑〔SK1〕(第12図、写真図版4-3・4)

E-2グリッドに位置し、調査区西縁と接している。最大幅は1.24mを測り、不整円形を呈す。最深部までの深さは0.90mである。覆土には、地山となる黄灰白色粘土を含み、また上層には微量の炭化物を含んでいた。覆土下層から正置の状態で山茶碗4点が出土した。覆土は自然堆積であり、山茶碗を埋置した後に自然に埋没したものと考えられ、遺構廃棄時の何らかの儀礼を表わしている可能性が高い。山茶碗Ⅱ期-1に比定でき、12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

1号溝状遺構〔SD1〕(第13図、写真図版5-1・2)

C～E-2グリッドに位置し、調査区西縁と接する。全長16.90m、最大幅2.78m、最深部までの深さは0.10mを測る。掘削深度は非常に浅く、溝底に近い。覆土は單一土層である。覆土下位から山茶碗が、他に甕や樹皮が出土した。12世紀後半に位置付けられよう。

2号溝状遺構〔SD2〕(第12図、写真図版4-5)

E・F-2グリッドに位置する。全長5.66m、最大幅0.70m、最深部までの深さは0.08mを測る。出土遺物は土器細片のみで固化できなかつたが、周辺の遺構と同時期の12～13世紀の遺構と考えられる。

3号溝状遺構〔SD3〕(第14図、写真図版5-3・6-1・2、15-4)

F・G-1グリッドに位置し、調査区西縁、南縁と接している。全長12.86m、最大幅0.86m、最深部までの深さは0.50mを測る。覆土には、地山である灰白色粘土を含んでいた。

覆土上層から須恵器壺身・甕、土師器甕が出土した。須恵器壺身・土師器甕は北部から散在的に、須恵器甕は中央部からまとまって出土した。須恵器甕は肩部が東側・底部が西側に集中的に出土した。覆土は自然堆積であり、これらの遺物は溝状遺構の埋没時最終段階に破棄したものと考えられる。口縁部はなく、故意に欠いてから破棄した可能性が高い。最も新しい出土土器は、V期後葉（新改階）に比定できることから8世紀中頃またはややそれを遡る時期の遺構と考えられよう。なお上層から貝類（ヤマトシジミ）が出土した。

土器集中1〔第15図、写真図版6-3〕

G-2グリッドに位置する。明確な掘り込みを伴わないが、土師器台付甕4点、甕胴部片がまとまって出土した。これらの土器類は古墳時代前半期III～IV期-1（以下、吉墳時代を省略）に比定できる。しかし、これらの土器は周辺の遺構の時期とは齟齬がある。台付甕は調整窓が磨滅しているものの、形状を留めているものがあり、それほど遠隔地ではない調査区外西方から流入したか、第2遺構面の遺物が何らかの要因で浮き上がったものと推定しておきたい。

第1遺構面の遺物〔第16・17図、写真図版11・12〕

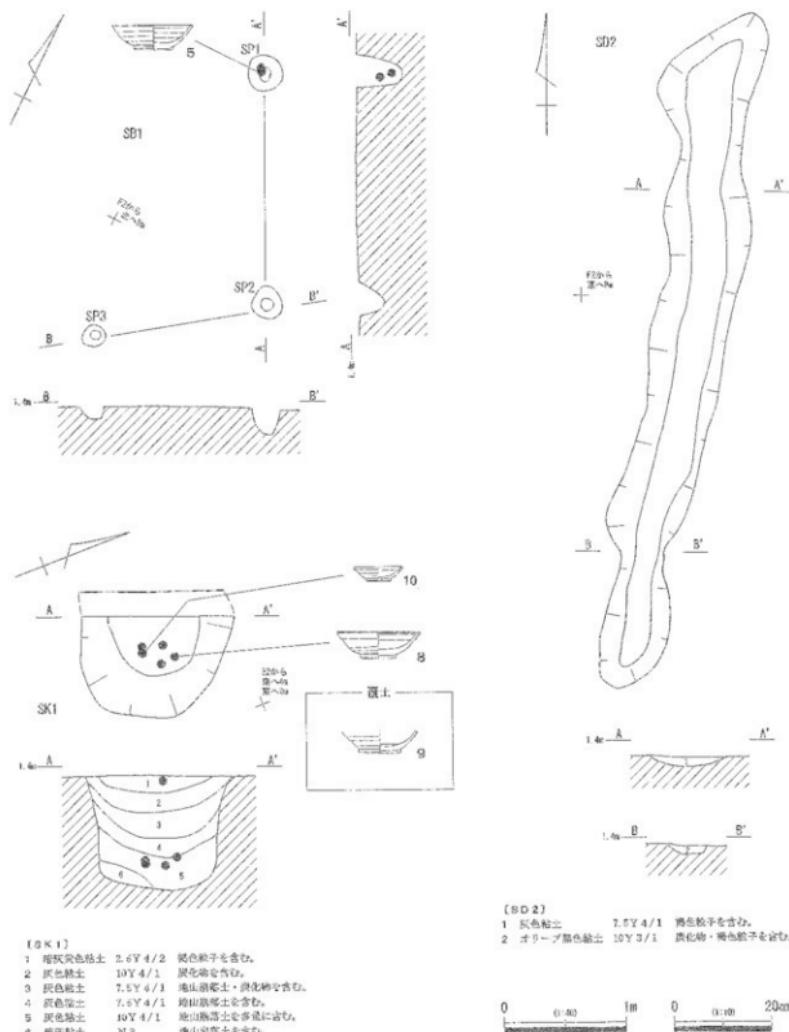
固化した遺物は計24点で、第16・17図に示した。遺構ごとに詳細を記述していく。

1号孤立柱建物跡出土遺物〔第16図5、写真図版11-5〕

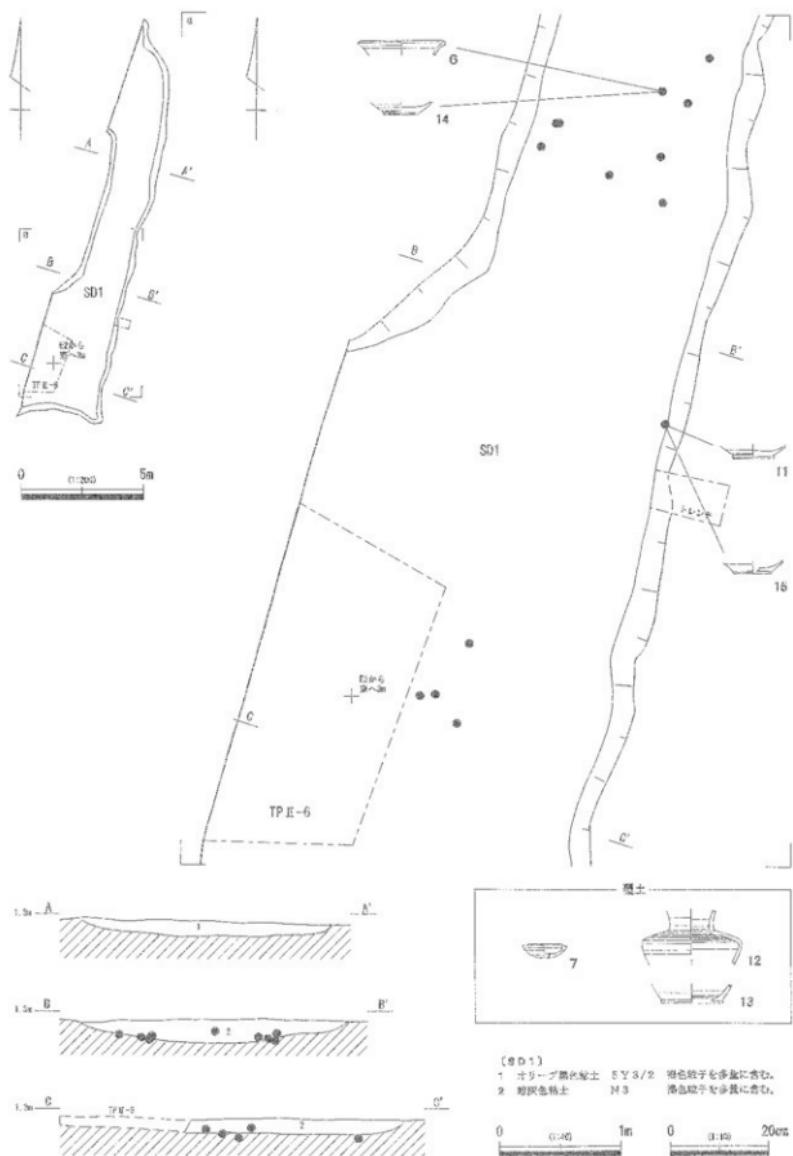
1号ピットから山茶碗2個体が出土した。5は碗である。高台には擦痕が、底部外面には糸切り痕が認められる。底部内面には使用痕・煤が付着する。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう（松井 1992）。胎土から渥美・瀬戸型山茶碗と考えられる。

1号土坑出土遺物〔第16図8～10、写真図版11-8・10〕

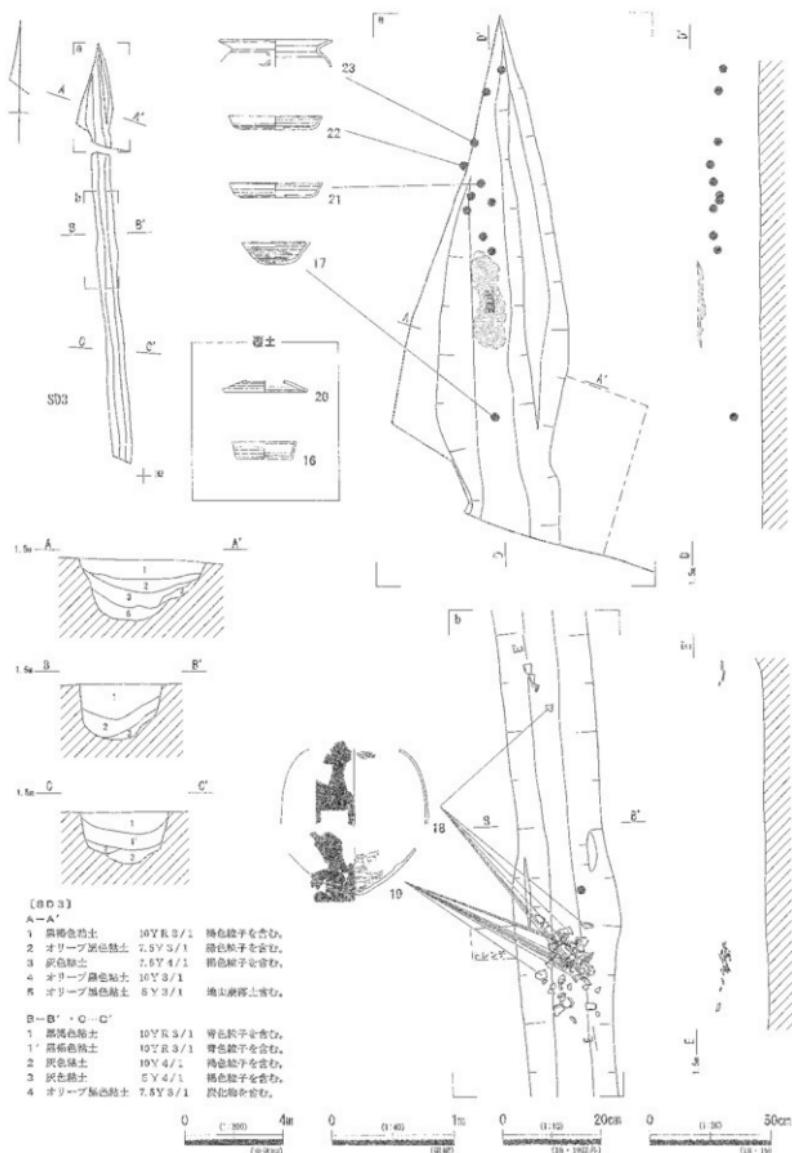
底面付近から山茶碗3個体が、上層から1個体が出土し、その内3点を図示した。いずれも胎土から渥美・瀬戸型山茶碗であると推定できる。8は碗である。底部内面には、使用痕・煤が認められる。口径がやや大きいが高台の特徴からⅡ期-1に比定でき、12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。9は碗である。底部外面の一部に糸切り痕が残り、底部内面には使用痕が認められる。Ⅲ期-1に位置づけられる。10は小碗である。口唇部は上方へつまみ上げられ玉縁状を呈す。底部外面に糸切り痕が、高台



第12図 SB1・SK1・SD2実測図



第13図 SD1実測図



第14図 SD3実測図

にスノコ状圧痕が残る。器高・高台の特徴から12世紀中葉に位置付けられる。

1号溝状遺構出土遺物（第16図6・7・11～15）

6・7・12・13は須恵器、11・14・15は山茶碗で覆土下層から出土した。6は蓋である。口縁部は矩形を呈し、口唇部は上方へ向かって突出する。内外面に自然釉が認められる。7は环身で、胎土・器形から瀬西窯の製品であると考えられる。IV期前葉に位置付けられる。11は碗である。底部内面に使用痕が、外面に糸切り痕が認められる。胎土からみて東遠型山茶碗であろう。山茶碗II期-1に比定できる。12は須恵器長頸甌で、覆土上層・下層や包含層から出土した個体と接合関係にある。胎土から瀬西窯群（以下、瀬西窯と略称）で生産されたと考えられる。V期後葉（古段階）に比定でき（鈴木 1998）、8世紀後半に位置付けられる。13

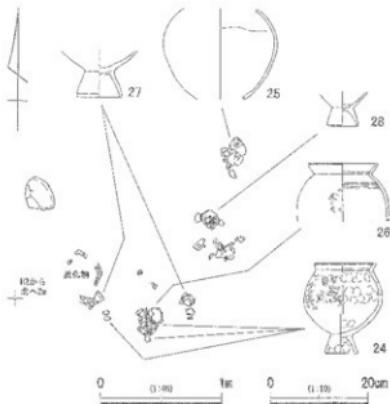
は12と同一個体と考えられるが、直接接合はしない。14は碗である。高台に切痕が認められる。底部内面・破面に煤が付着する。破片後、被熱したものと考えられる。胎土からみて東遠型山茶碗である。山茶碗II期-1に比定できる。15は底部内面に使用痕が認められる。高台はやや丁寧なつくりだが、わずかに切痕が認められる。尾張型山茶碗であるが、胎土から常滑古窯群の製品である可能性がある。口縁部が欠損しているため判然としないが、3～4型式であろう。

3号溝状遺構出土遺物（第16図16～22・第17図23、写真図版11～17・21・23）

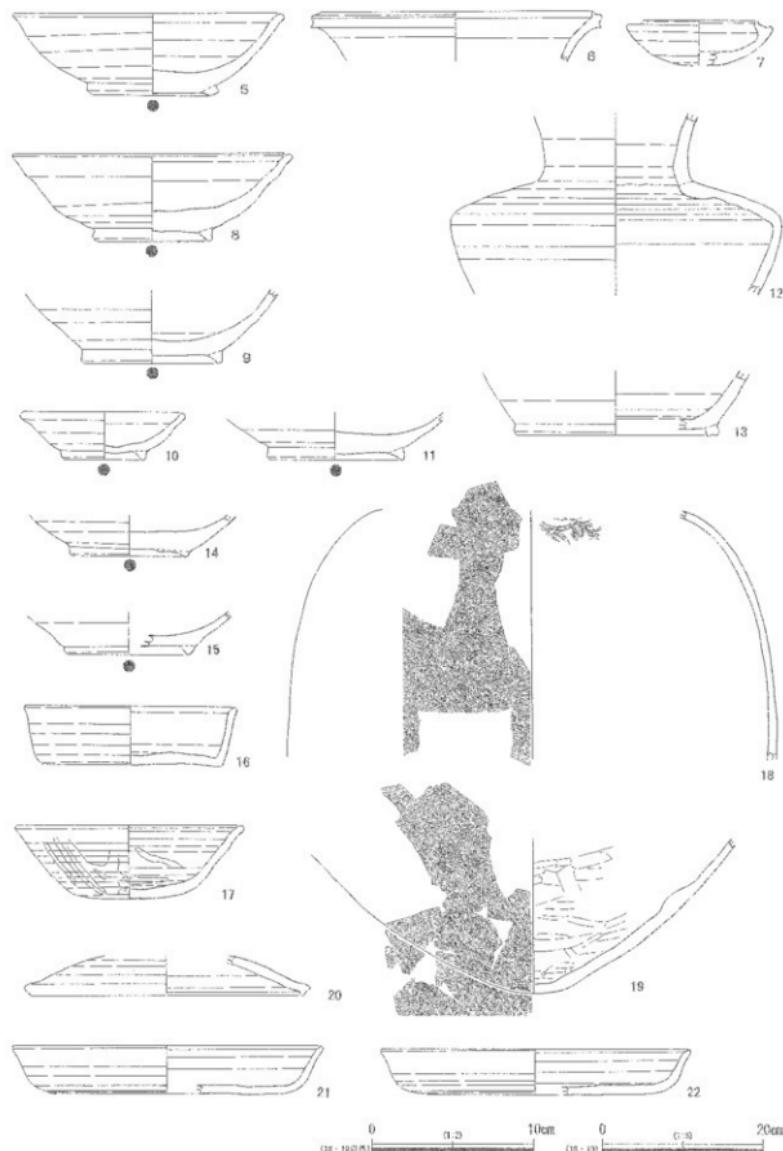
16～22は須恵器、23は土師器で覆土上層から出土した。16は环身である。いわゆる箱坏であり、底部は上げ底状となる。瀬西窯の製品と考えられる。V期後葉（新段階）に位置付けられる。17は环身である。ロクロ目が顯著で、内外面に火漆が認められる。V期前葉に位置付けられる。18・19は須恵器甌である。肩部内面に当て具痕がわずかに残るがナデ消される。底部内面にもナデ調整がみられる。18・19は同一個体であると考えられるが、直接接合はしなかった。胎土から瀬西窯の製品であると考えられる。20は环蓋である。内外面に重ね焼痕が認められる。V期前葉（古段階）に比定できる。21・22は皿である。底部外縁にヘラ削りが施され、口唇部に浅い沈線が残る。V期後葉（新段階）に位置付けられる。23は長胴甌である。肩部内面に粘土帯を貼り付けて、口縁部を接合している。IV期後葉に位置付けられよう。

土器集中1出土遺物（第17図24～28、写真図版12～24・26・27）

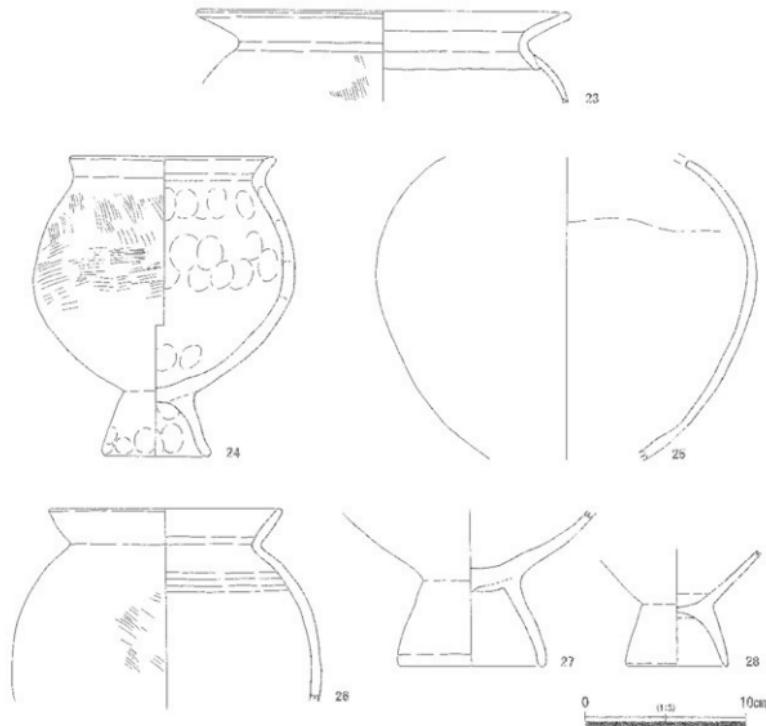
24～28は土師器台付甌で、25は上・下位を欠損しているが丸底窓ないし台付甌であろう。いずれも基本本土層X層上面から出土した。台付甌は小型（24・28）と大型（25～27）の一組がある。27の接合方法が特徴的で、台部と甌底部の間に粘土を充填し、その周囲に粘土を貼り付けて接合している。古墳時代前半期III～IV-1期（松井 1995）に比定でき、5世紀後半頃に位置づけられるであろう。



第15図 土器集中1実測図



第15図 SP1・SD1・3・SK1出土遺物実測図



第17図 SD3・土器集中1出土遺物実測図

(2) 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面の遺構（第18～26図、写真図版7-1）

掘立柱建物跡3棟、柱穴・小穴38基、土坑7基、溝状遺構18条、性格不明遺構3基を検出した。第2遺構面直上に堆積していた包含層（基本土層X層）では古墳時代土師器や須恵器、灰釉陶器、少量の山茶碗が混在し、包含層（基本土層XI層）からは土師器のみが出土した。第2遺構面では遺構に伴う遺物が少なく、直接時期比定を行えなかった。包含層や遺構覆土中にも山茶碗が含まれており、包含層は二次堆積層であると判断できる。

第1遺構面では主に12世紀後半を主体とした8世紀中頃までの遺物が出土した。第1遺構面での遺物出土状況と包含層出土遺物から当該遺構面は4世紀末～7世紀中頃であると推定しておきたい。以下、各遺構の詳細を記述していく。

2号掘立柱建物跡〔SB2〕(第19図、写真図版7-2)

D-4・5、E-4・5グリッドに位置し、3号掘立柱建物跡を切っている。桁行4.60m、梁行3.88mを測る3間×2間の東西棟建物跡である。柱穴はすべて不整円形で、直径0.2～0.5mを測る。主軸方向はN-85°-Eである。柱間寸法は、桁行は1.37～1.73m、梁行は1.70～2.18mで、一定していない。柱穴の深さは最深部で、0.1～0.56mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

3号掘立柱建物跡〔SB3〕(第19図、写真図版7-2)

D-4・5、E-4・5グリッドに位置する。2号掘立柱建物跡に切られていたが、柱穴5基が残存していた。2号掘立柱建物跡と並行するように位置していたと考えられる。柱穴の深さは最深部で、0.10～0.20mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

4号掘立柱建物跡〔SB4〕(第20図、写真図版8-1)

F-3・4グリッドに位置する。桁行2.92m、梁行2.80mを測る1間×2間の東西棟建物跡である。柱穴はすべて円形で、直径0.22～0.30mを測る。主軸方向は、N-84°-Wである。柱間寸法は桁行2.82～2.92m、梁行1.34～1.48mで、ほぼ等間隔に柱穴が並んでいる。柱穴の深さは最深部で、0.18～0.4mである。柱穴の多くが、上部がすり鉢状で、下部は円柱状に延びており、柱材を据え付けていたと考えられる。また17号溝状遺構を切っていた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

2号土坑〔SK2〕

D-2グリッドに位置する。長軸1.10m、短軸0.56mを測り、楕円形を呈する。最深部までの深さは0.08mである。遺構覆土は単一土層であり、自然堆積したと考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

3号土坑〔SK3〕(第21図)

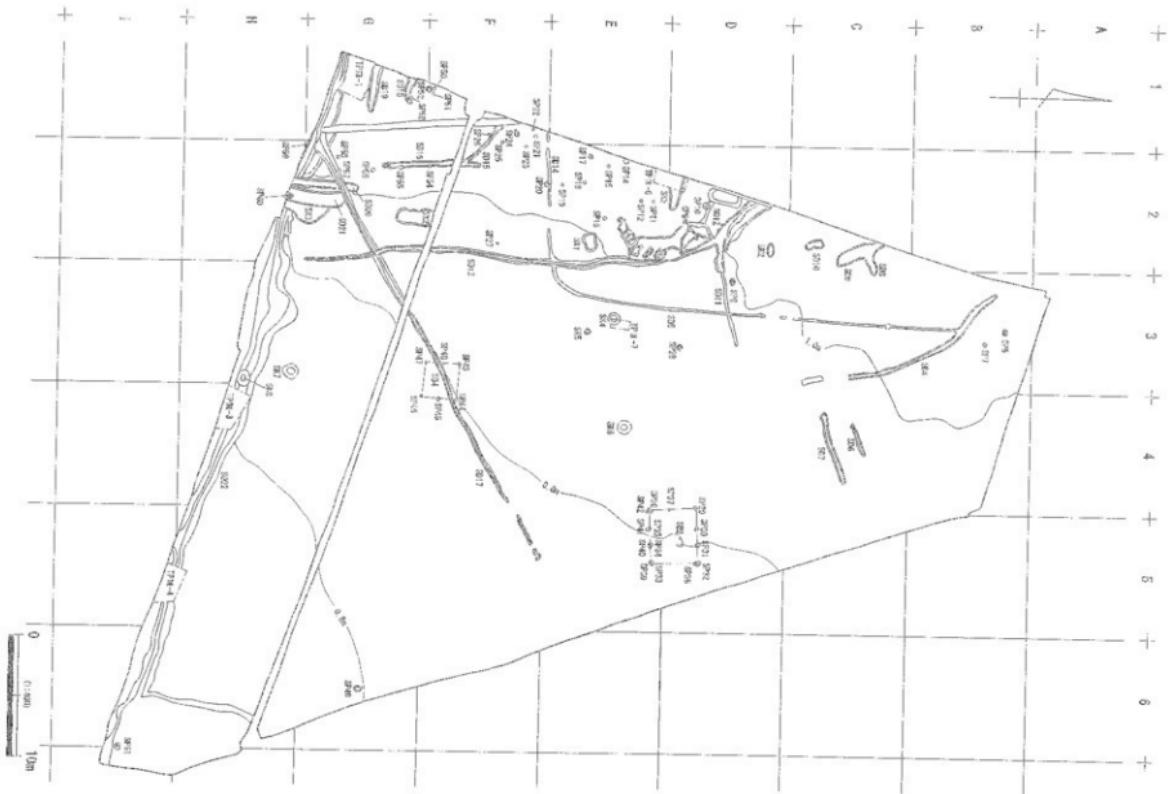
D-2グリッドに位置し、調査区西隣と接する。また試掘坑（1区TP II-6）に西半部を切られている。長軸3.00m、短軸0.90mを測り、楕円形を呈する。最深部までの深さは、0.08mである。出土遺物は土器縦片のみのため、帰属時期は不明である。なお、TP II-6からは5世紀後半の土師器高杯が出土している。

4号土坑〔SK4〕(第21図、写真図版9-1)

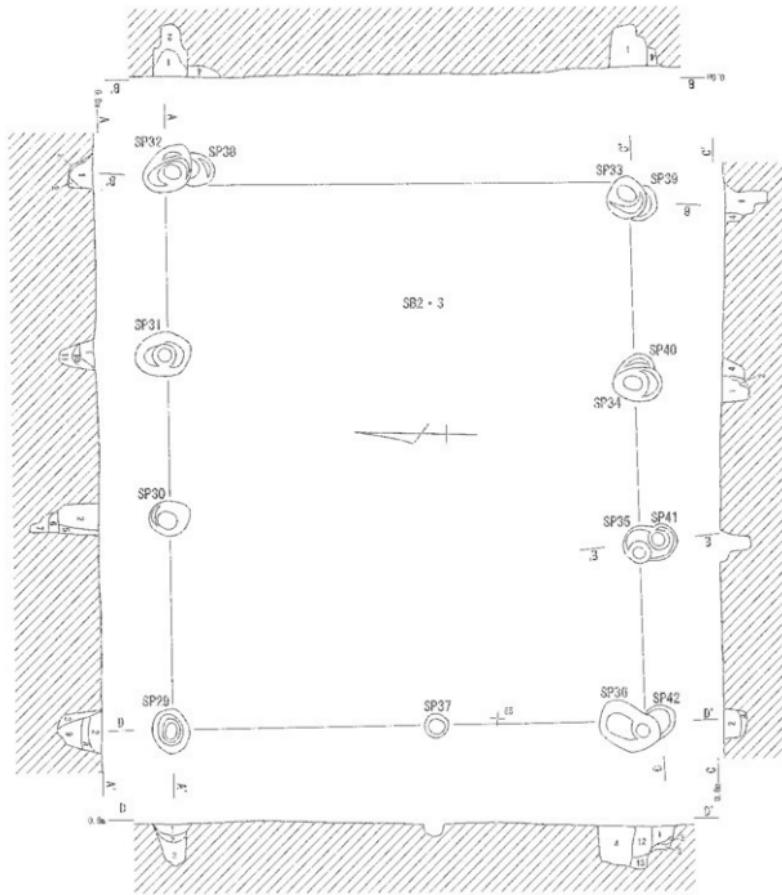
E-3グリッドに位置する。最大長0.98mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは、0.88mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には砂質土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

5号土坑〔SK5〕(写真図版9-2)

E-3グリッドに位置する。長軸0.54m、短軸0.46mを測り、不整円形を呈する。最深部までの深さは0.20mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には地山崩落土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第18図 第2遺構面調査区全体図



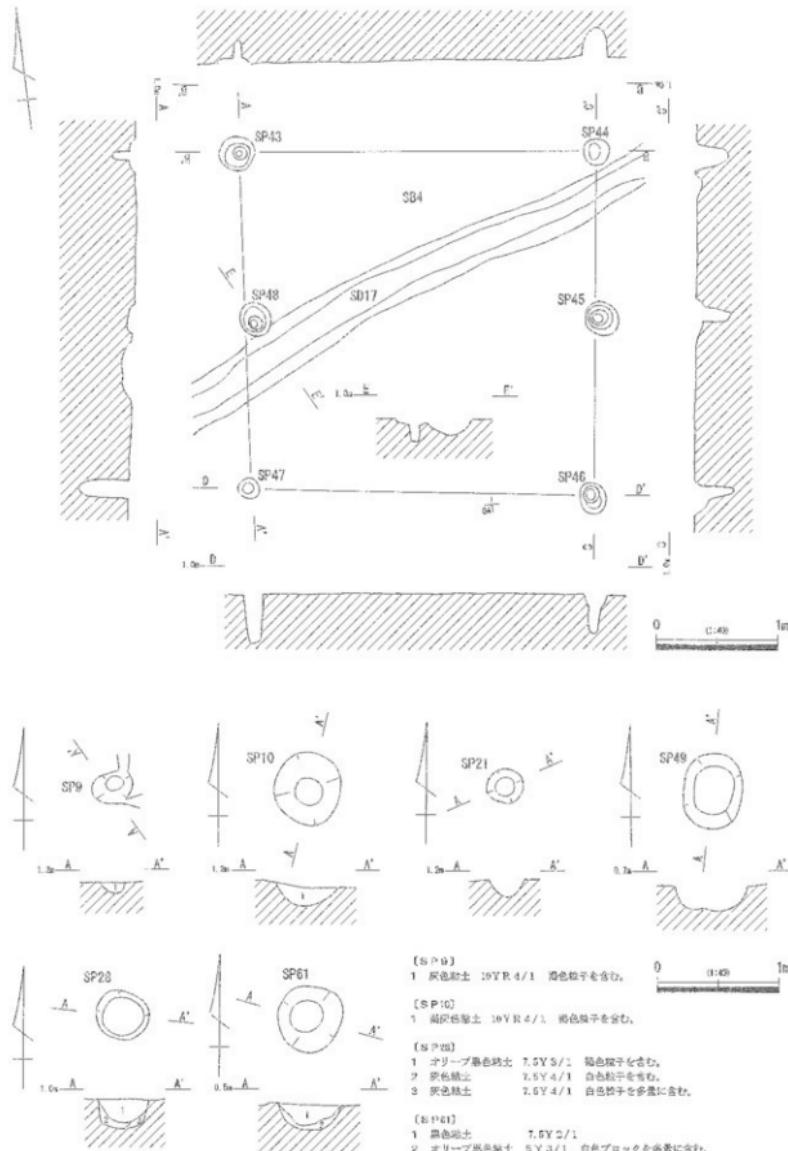
【SB2・3】

- | | | | |
|----|----------|-----------|---------------|
| 1 | オリーブ褐色粘土 | 6Y 3/1 | 白色ブロックを含む。 |
| 2 | 灰白色粘土 | 6Y 4/1 | 白色ブロックを少數含む。 |
| 3 | 深色粘土 | 19Y 6/1 | 白色ブロックを多量に含む。 |
| 4 | 灰褐色粘土 | 5Y 4/1 | 白色ブロックを含む。 |
| 5 | 灰褐色粘土 | 10Y 4/1 | 白色ブロックを少數含む。 |
| 6 | 灰褐色粘土 | 10Y 5/1 | 白色ブロックを含む。 |
| 7 | 灰褐色粘土 | 6Y 4/1 | 白色ブロックを含む。 |
| 8 | 灰色粘土 | 10Y 4/1 | 白色、基底ブロックを含む。 |
| 9 | 灰褐色粘土 | 5Y 4/1 | 白色ブロックを含む。 |
| 10 | 灰褐色粘土 | 10Y 4/1 | 白色ブロックを少數含む。 |
| 11 | 暗緑灰色粘土 | 10G Y 3/1 | 白色ブロックを多量に含む。 |
| 12 | 黄灰色粘土 | 2.5Y 4/1 | 白色ブロックを少數含む。 |
| 13 | オリーブ褐色粘土 | 7.5Y 3/1 | |



0 0.40 1.3

第19図 SB2・3 美測図



第20図 SB4・ピット変測図

6号土坑〔SK6〕(第21図、写真図版9-3~5)

E-4グリッドに位置する。最大長1.20mを測り、円形を呈する。最深部の深さは0.7mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には砂質土を含んでいた。また、底面付近を覆うように炭化物が残存していた。炭化物はアシ類で、火を伴う何らかの行為が行われたと考えられるが、遺構底面や覆土には被熱の痕跡はみられなかった。覆土上層から古墳時代中期末から後期前葉に位置付けられる土器器台付壺1点が出士した。遺構に伴わなかったため帰属時期は不明である。

7号土坑〔SK7〕(第21図、写真図版9-6)

H-3グリッドに位置する。最大長1.22mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは0.81mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

8号土坑〔SK8〕(第21図、写真図版9-7)

H-3グリッドに位置する。最大長0.98mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは0.76mである。22号溝状遺構を切っている。覆土中層から土器器台付壺1点が出士した。古墳時代後期に位置づけられる可能性があるが、遺構に伴わなかったため帰属時期は不明である。

4号溝状遺構〔SD4〕

B-C-3グリッドに位置する。全長17.90m、最大幅0.60m、最深部までの深さは0.06mを測る。覆土は自然堆積で、地山である黄灰白色粘土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

5号溝状遺構〔SD5〕

B-E-3、E-2グリッドに位置する。全長34.3m、最大幅0.20m、最深部までの深さは0.11mを測る。4号溝状遺構と覆土が同一であったことから、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

6号溝状遺構〔SD6〕

C-E-4グリッドに位置する。全長2.90m、最大幅0.44m、最深部までの深さは0.11mを測る。7号溝状遺構と平行して位置することから、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

7号溝状遺構〔SD7〕

C-E-4グリッドに位置する。全長6.20m、最大幅0.46m、最深部までの深さは0.06mを測る。6号溝状遺構と平行して位置する。出土遺物は土器片のみで、帰属時期は不明である。

8号溝状遺構〔SD8〕

C-E-2+3グリッドに位置する。全長1.70m、最大幅0.62m、最深部までの深さは0.04mを測る。9号溝状遺構と切り合い関係にあるが、遺構覆土は同一であり同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

9号溝状遺構〔SD9〕

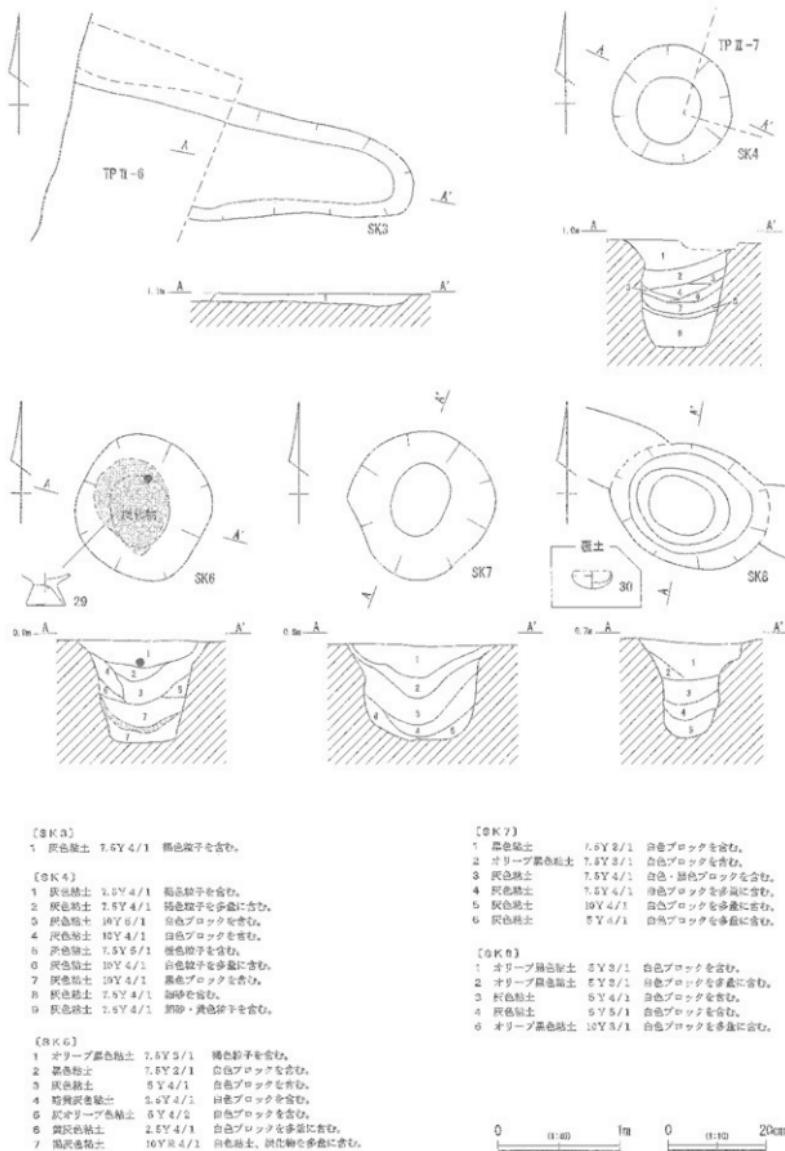
C-E-2グリッドに位置する。全長4.40m、最大幅1.06m、最深部までの深さは0.06mを測る。8号溝状遺構と遺構覆土は同一である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

10号溝状遺構〔SD10〕

C-E-2グリッドに位置する。全長1.48m、最大幅0.72m、最深部までの深さは0.05mを測る。8・9号溝状遺構と遺構覆土は同一である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

11号溝状遺構〔SD11〕

D-E-2+3グリッドに位置する。全長8.45m、最大幅0.28m、最深部までの深さは0.06mを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第21図 SK3・4・6～8実測図

12号溝状遺構 [SD12] (第22図、写真図版10-1・2)

D・E-2グリッドに位置する。全長13.30m、最大幅0.08m、最深部までの深さは0.16mを測る。13号溝状遺構に切られているが、12号溝状遺構は12号溝状遺構側壁に沿うように掘削されている。覆土は標準され、暗灰色粘土と青灰色粘土が混在していた。覆土下層から灰陶器が出土したが、自然堆積ではなく、正確な時期は不明である。

13号溝状遺構 [SD13] (第23図)

D～G-2グリッドに位置する。全長38.30m、最大幅0.28m、最深部までの深さは0.08mを測る。12・17号溝状遺構を切っていた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

14号溝状遺構 [SD14]

E-2グリッドに位置する。全長10.60m、最大幅0.20m、最深部までの深さは0.07mを測る。13号溝状遺構と覆土が同一であり、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

15号溝状遺構 [SD15]

F-1・2グリッドに位置する。全長4.45m、最大幅0.34m、最深部までの深さは0.05mを測る。16号溝状遺構と覆土が同一であり、同時期の遺構と考えられる。出土遺物は土器破片のみで、帰属時期は不明である。

16号溝状遺構 [SD16] (第25図)

F・G-2グリッドに位置する。全長8.15m、最大幅0.57m、最深部までの深さは0.05mを測る。SP54・55と切り合い関係にあるが、覆土は同一で、溝をやや掘り下げた段階でピットの覆土が確認できため同時期の遺構と考えられる。このような遺構は北ハサマ遺跡IIでも確認されている。ピット(SP54・55・56・57)は柱筋があり、襖列である可能性もあるが、明確な柱痕は確認できなかった。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

17号溝状遺構 [SD17] (第23図)

G-2・3、F-3・4・5グリッドに位置する。全長37.48m、最大幅0.80m、最深部までの深さは0.06mを測る。4号掘立柱遺物跡に切られている。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

18号溝状遺構 [SD18]

G-1グリッドに位置する。全長2.15m、最大幅0.8m、最深部までの深さは0.06mを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

19号溝状遺構 [SD19] (第25図)

G-1グリッドに位置する。全長3.88m、最大幅0.8m、最深部までの深さは0.12mを測る。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

20号溝状遺構 [SD20] (第25図、写真図版10-3)

G-2グリッドに位置する。全長4.61m、最大幅0.68m、最深部までの深さは0.11mを測る。土師器壺が出土したが、底部片のみであったため帰属時期は不明である。

21号溝状遺構 [SD21] (第25図、写真図版10-3)

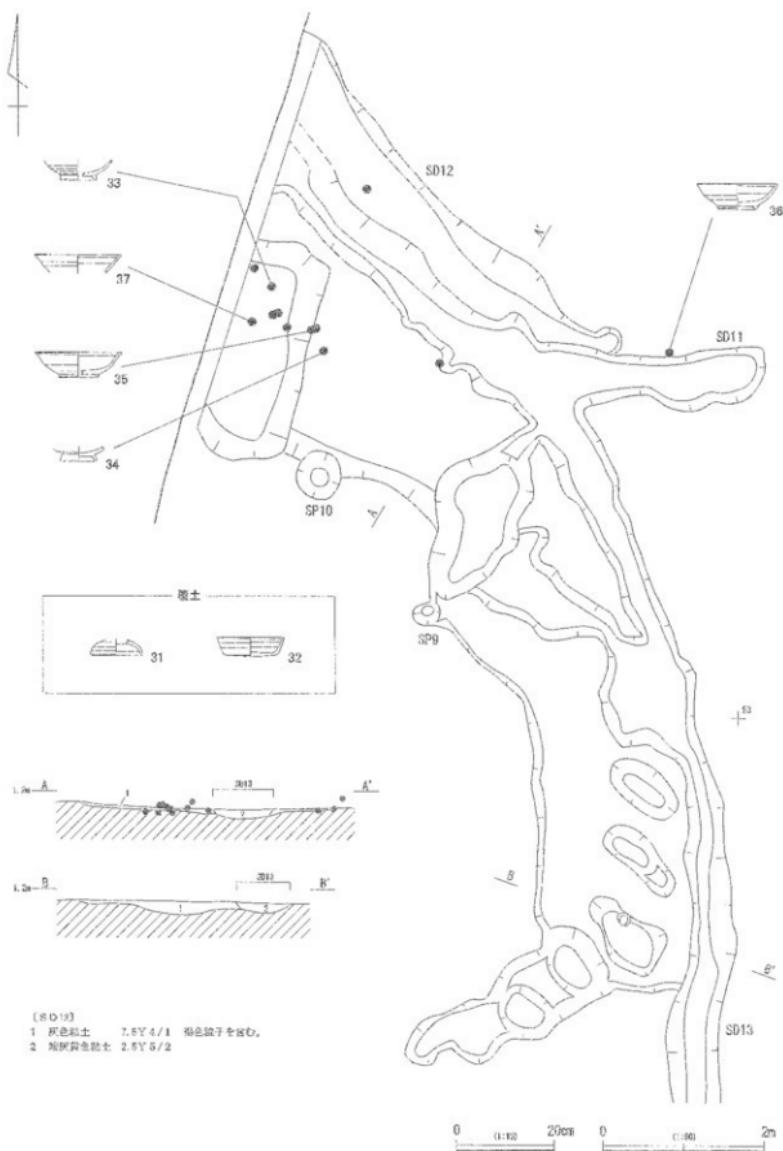
G・H-2グリッドに位置する。全長4.15m、最大幅1.16m、最深部までの深さは0.11mを測る。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

22号溝状遺構 [SD22] (第26図、写真図版10-4)

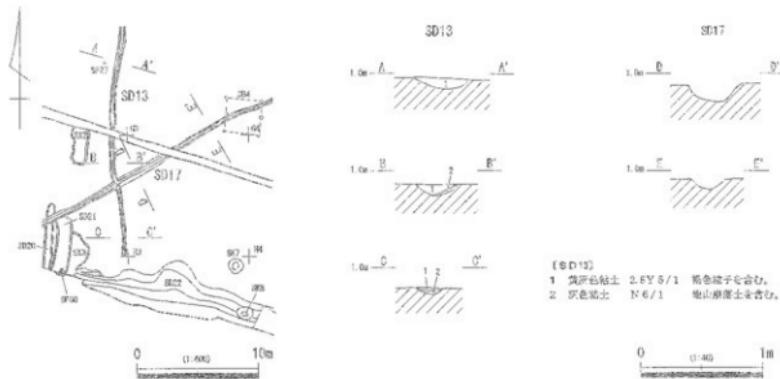
G-1・2、H-2～5、1-5・6グリッドに位置する。全長59.20m、最大幅2.84mを測る。覆土上層から土師器高杯が、下層からは山茶碗小片が出土した。

1号性格不明遺構 [SX1] (第26図、写真図版10-5)

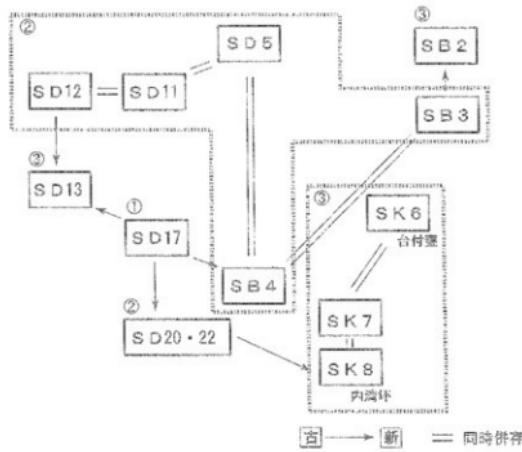
E-2グリッドに位置する。不定形で非常に浅く、隆地状である。底面から土師器壺が出土した。前



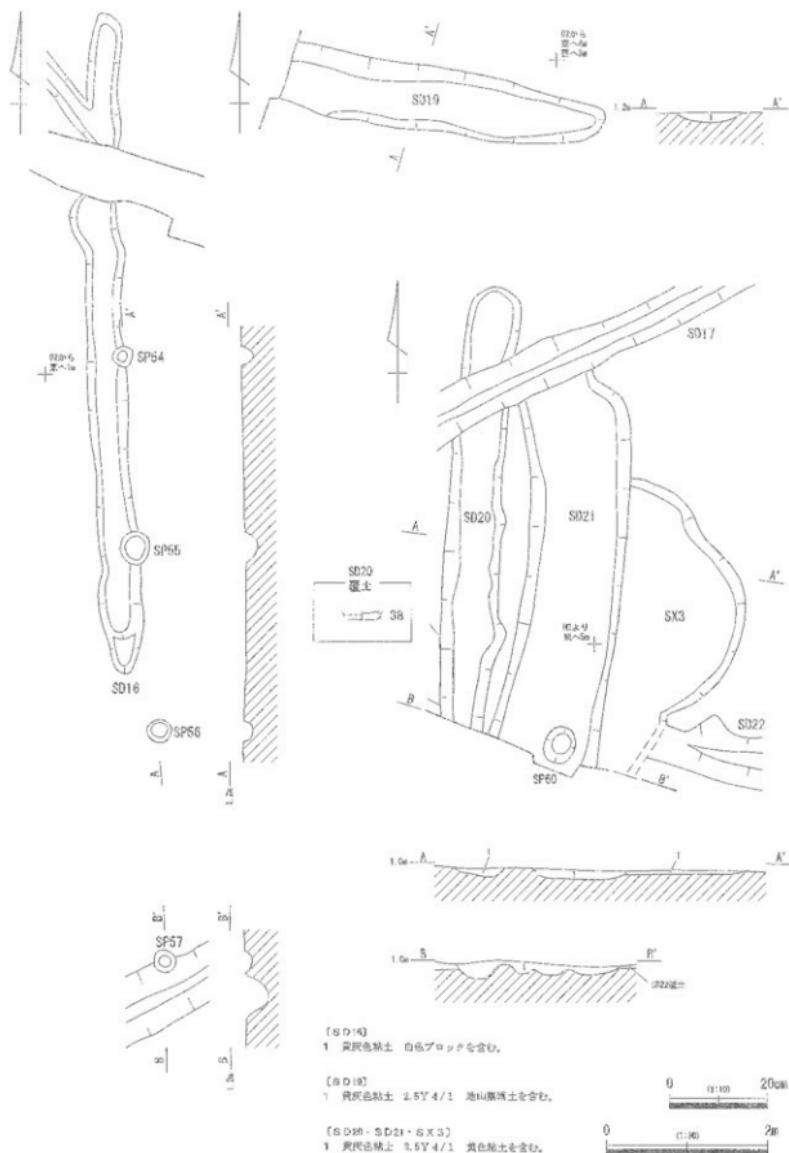
第22圖 SD12實測圖



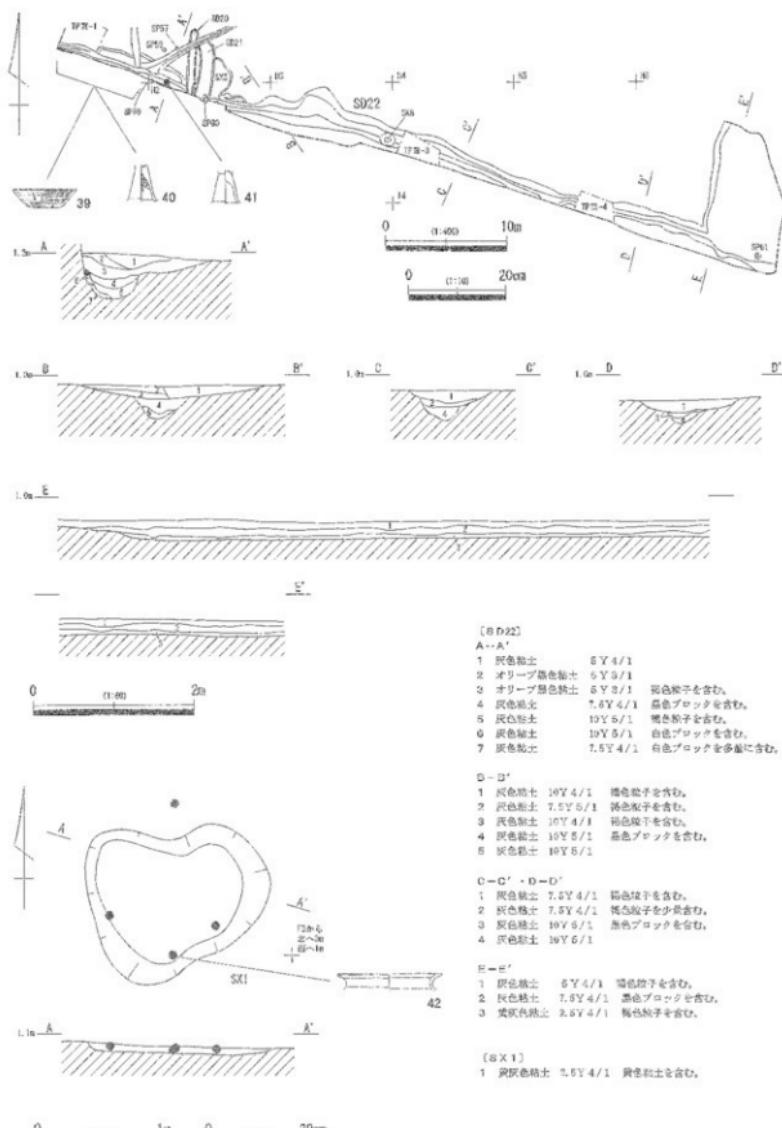
第23図 SD13 + 17実測図



第24図 第2選査面検出造構の切り合い関係



第25図 SD16・19・20・21・SX3実測図



第26図 SD22・SX1実測図

半期II規-4～田規-1に比定でき、7世紀前半～中頃に位置付けられる。

小結（第24図）多くの遺構で遺物が伴わず、その帰属時期が確定できなかつたため、遺構間の関係や遺構覆土の状況から帰属時期を推定しておきたい。第1遺構面の遺物出土状況と包含層出土遺物から考えると、第2遺構面は4世紀末～8世紀前半の遺構面であると考えられる。ただ、包含層出土土器の中には、7世紀後半～8世紀前半の資料は含まれていないため、空白期間となる可能性が高く、当該面は4世紀末から7世紀中頃に絞られる可能性が高い。以下、遺構間の関係を示す。

まず、4号掘立柱遺物跡は5号溝状遺構とほぼ直行することから、同時期に機能していたと考える。5号溝状遺構と11・13号溝状遺構には覆土に差異が認められず、同時に埋没したものと考える。13号溝状遺構は12号溝状遺構覆土を切り、12号溝状遺構と沿うように掘削されていることから、13号溝状遺構が埋没し、時に絶えず削除されたことが推定できる。13号溝状遺構が17号溝状遺構を切っており、さらに17号溝状遺構は20・22号溝状遺構を切っていた。また、3号掘立柱遺物跡と4号掘立柱遺物跡は覆土が類似することから同時期の遺構と考えられ、切り合ひ関係から3号掘立柱遺物跡より2号掘立柱遺物跡が新しい。

土坑については詳細が不明であるが、6～8号土坑は形態・深さ・遺構覆土が類似しており、同時期の遺構である可能性が高い。6・8号土坑からは土師器台付瓶脚部や小型の片が出土しており、新しい土器が混ざっていることはなかった。また、8号土坑は22号溝状遺構を切っていた。このことから多くの遺構が古墳時代中期末頃かそれをやや遡る時期に比定できる可能性があるが、明確でない。

第2遺構面の遺物（第27図、写真図版12）

図化した遺物は計14点で、第27図に示した。遺構ごとに詳細を記述していく。

6号土坑出土遺物（第27図29）

29は土師器台付甕で覆土上層から出土した。脚部内面の一部にハケ目が残る。古墳時代中期末～後期前葉に位置付けられよう。

8号土坑出土遺物（第27図30、写真図版12-30）

30は土師器ミニチュア土器で、覆土中層から出土した。底部内面に指頭痕が認められる。古墳時代後期の内渦环を小型化したような器形だが、正確な時期比定は困難である。

12号溝状遺構出土遺物（第27図31～37）

31・32は須恵器で覆土上位から、33・34は灰釉陶器、35～37は山茶碗で覆土下位から出土した。31は环蓋である。胎土・器形から湖西窯の製品と考えられる。IV期前葉に比定できる。32は环身である。底部と体部の境と底部周囲に回転ヘラ削りが施される。V期後葉に位置付けられる。33は碗である。内面に自然釉が認められるが、施釉の有無は不明である。青灰色を呈し、砂礫を含んでいることから東濃諸窯の製品であると考えられる。11世紀代の所産であろう。34は碗である。高台が高いことが特徴で、深くないし大型碗であると考えられる。胎土から宮口古窯群で生産されたものと推定できる。灰釉陶器IV期-2に位置づけられるであろう。35は碗である。底部内面に使用痕が、外面上には糸切り痕が僅かに確認できる。胎土から尾張型山茶碗であると考えられ、常滑古窯群産である可能性がある。4型式に位置づけられよう。36は碗である。底部内面に使用痕・墨痕が認められる。高台には粉底が認められる。山茶碗I期-2に比定できる。37は碗である。胎土から東濃型山茶碗であると考えられる。

20号溝状遺構出土遺物（第27図38）

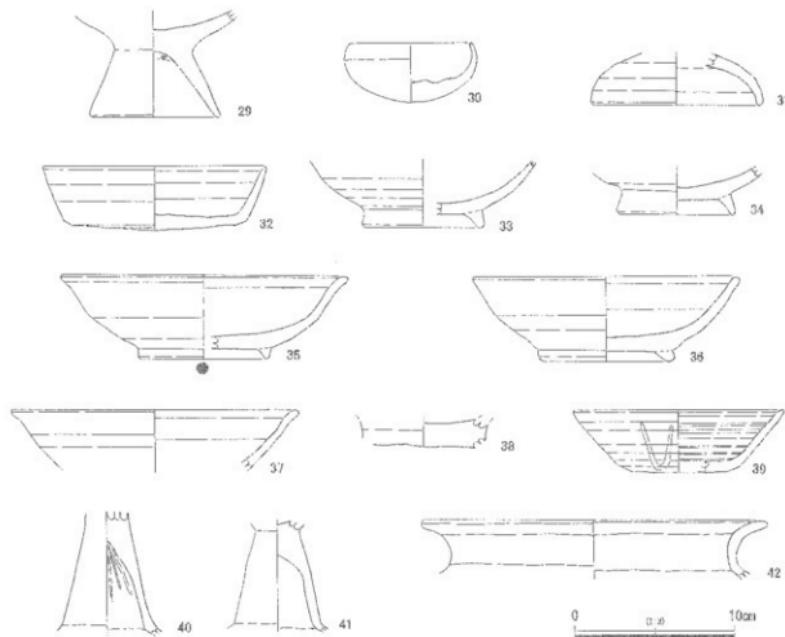
38は土師器壺または甕と考えられる。底部と体部の境に粘土縫を充填している。古墳時代の壺・甕の底部部である可能性もあるが、明確にできない。

22号溝状遺構出土遺物（第27図39～41）

39は須恵器平身で覆土上層から出土した。内外面に火ழがみられ、ロクロ目が明瞭である。V期後葉（古段階）に比定でき、8世紀後半に位置付けられる。40・41は土師器高坏で、覆土上層から出土した。40は器面全面が磨滅しているが、脚部内面に残りの痕跡が認められる。41よりやや細く、脚部も長い。このことからやや古く、前半期Ⅳ期に比定できる。41も、外面調整痕は磨滅しているが、脚部内面の一帯にケズリが施されている。前半期IV-1期に比定でき、5世紀後半に位置付けられる。

1号性格不明遺構出土遺物（第27図42）

42は土師器長柄甌で、底面から出土した。口縁部のみ残存し、調整痕は磨滅している。平底になるのか不明であるが、口縁部の形態から7世紀前半～中頃に位置付けられるであろう。



第27図 SK6-8・SD12-20・22・SX1出土遺物縦断面

第4節 包含層・遺構外出土遺物

包含層や調査区周囲に掘削した排水溝出土遺物をここで報告する。

(1) 古墳時代の遺物（第28図43～62、写真図版12-50・51・61・63）

須恵器 43は平瓶である。口径は大きく、体部も大型であると推測できる。肩部に粘土粒が貼り付けられる。胎土から瀬西窯の製品であると考えられる。7世紀中頃に位置付けられよう。44は坏蓋である。天井部の約1/2に回転ヘラ削りが施され、口唇部を平坦面とする。古い要素をもつが、縁部の突出は弱いことからⅢ期前葉に位置付けられる。45は坏身である。底部外面の1/2以上にヘラ削りが施されているが、体部はやや扁平である。立ち上がりがすべて欠損しているため、判然としないがⅣ期中葉に位置づけられる。46は坏身である。胎土から瀬西窯の製品であると考えられる。Ⅳ期前葉に比定できる。47は坏身である。Ⅳ期末葉に位置付けられる。48は坏身である。立ち上がりは短いが、口唇部は平坦状となる。また、受け部直下が枕線状にやや絞んでいる。Ⅲ期末葉に位置付けられよう。

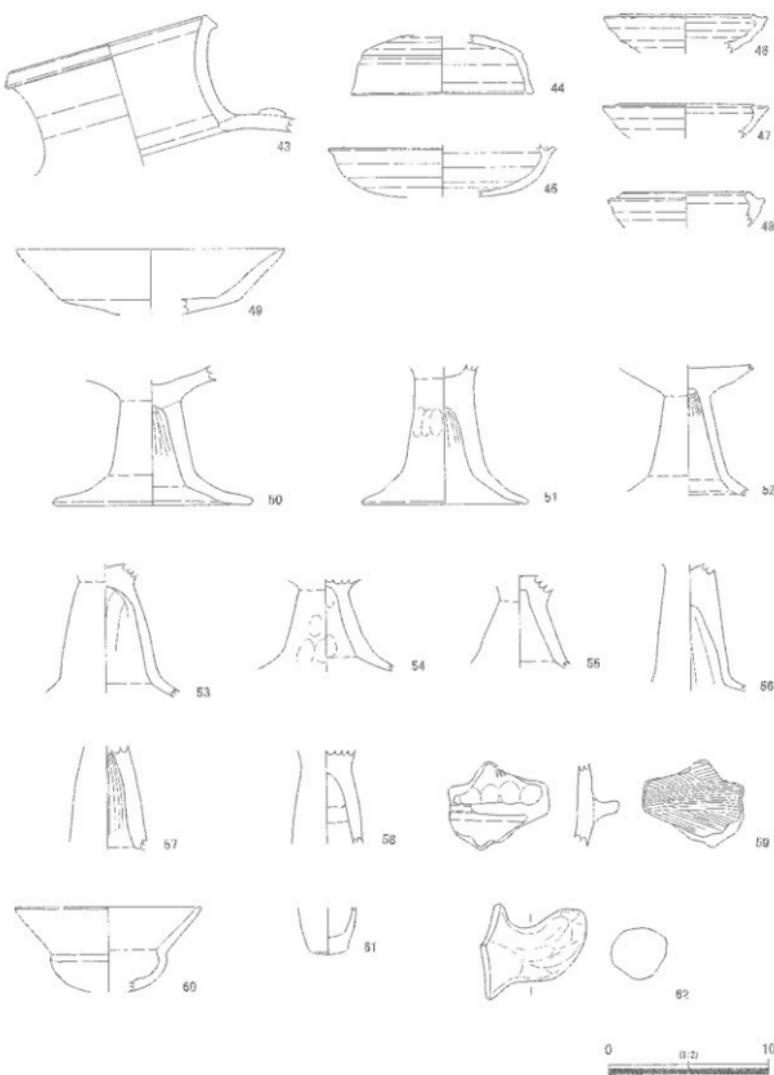
土師器 49～58は高杯である。50は縁部と脚部上半部で剥離しており、成形時に縁部を別段階に成形したと考えられる。また、縁部内面にナデ調整がみられ、粘土を充填し、脚部と接合している。前半期Ⅲ期に位置付けられよう。51は脚部と縁部の接合部が大きく壅み、50・52などと異なり、脚上部が柱突となる。この脚部上面に粘土を充填し、縁部を接合したと考えられる。52は縁部内面が底せず、縁底部が厚い。前半期Ⅳ期に比定できよう。53は脚部内面に縁部へ向かってナデが施される。前半期Ⅳ期-2に位置付けられる。54は脚部内面に粘土を充填し、縁部と接合している。前半期Ⅳ期-2に位置付けられる。55は脚部外面上位に墨斑がみられる。他の土師器と異なり、器面が荒れず焼成は良好である。57はあまり中膨らみせず、斜め下へ脚部が延びる。58は脚部内面に熱土緋の痕跡が残る。前半期Ⅳ期-2に比定できる。

埴輪 59は残存部上位がやや内湾することから朝顔型埴輪の可能性があるが明確でない。突帯の特徴から川西宏幸氏の円筒埴輪編年Ⅱ期（川西 1978）に比定できる可能性が高いが、器壁が薄いことが同時期に位置づけられる松林山古墳出土例と異なっている。遺跡周辺で埴輪をもつ古墳は、磐田原台地南部の松林山古墳・稻荷山古墳（連城寺6号墳）・高根山古墳などがあるが、いうまでもなくいずれの古墳も本遺跡と近接していない。周辺遺跡から出土したものと推測される。

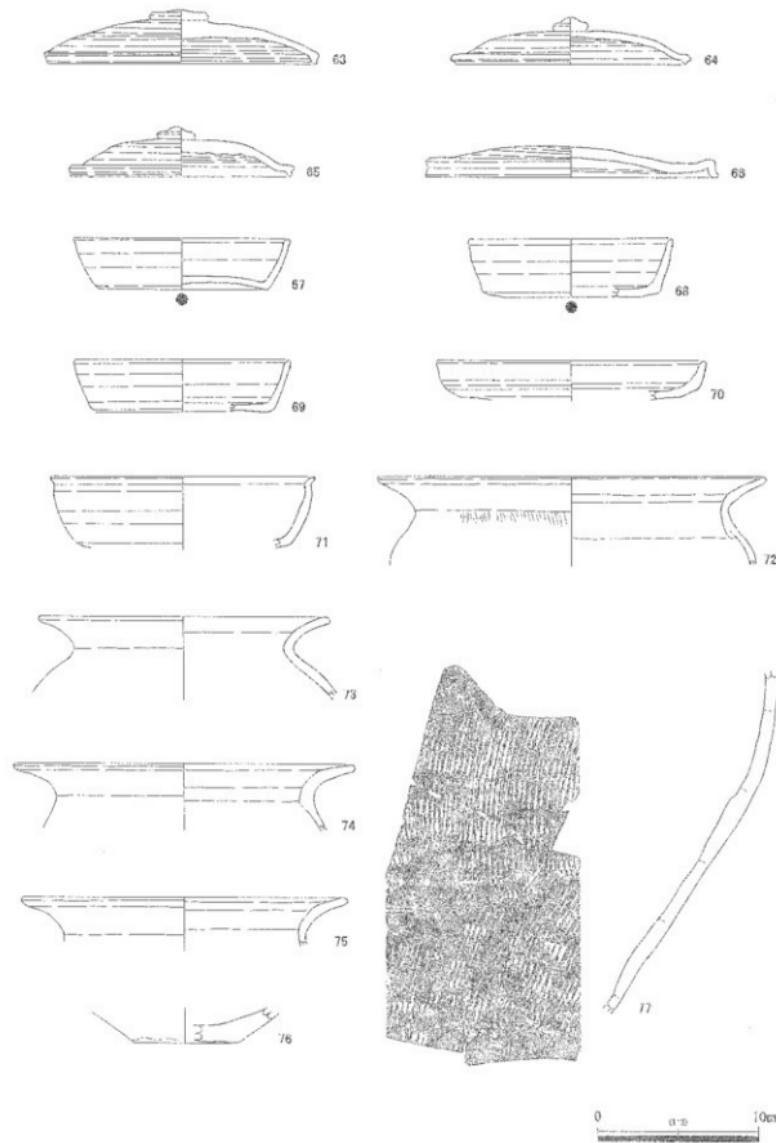
その他の遺物 60は土師器壺である。器面全面が磨滅しており、調整等は不明である。前半期Ⅱ-1～2期に位置付けられよう。61は土師器ミニチュア土器である。器面全面が磨滅している。62は土師器壺である。器面に粘土塊を貼り付けて接合している。正確な時期は不明であるが、形態的特徴から古墳時代に比定できよう。

(2) 奈良時代の遺物（第29図63～76、写真図版13-64・66・68）

須恵器 63は坏蓋である。天井部に濃緑色の自然釉を被り、内面には重ね焼き痕が認められる。Ⅴ期前葉（古段階）に比定でき、8世紀前半に位置付けられよう。64は坏蓋である。痛みは小さく、器高は低い。胎土からみて瀬西窯の製品であろう。Ⅴ期前葉（新段階）に比定できる。65は坏蓋である。天井部にヘラ削り、天井部内面に重ね焼き痕が認められる。Ⅴ期前葉（新段階）に位置付けられる。66は坏蓋で、いわゆる平頂蓋である。天井部外面にヘラ削り、天井部内面に当て具痕が残る。Ⅴ期後葉（新段階）に位置づけられる。67は坏身である。重ね焼きによる焼け歪みがみられる。底部中央部以外はヘラ削りが施され、中央部に糸切り痕が残る。68は坏身である。底部と体部の境は当てによって底部中央部が突出し、糸切り痕が残る。Ⅴ期後葉（古段階）に比定できよう。69は坏身である。67・68と異なり、底部と体部の境に回転ヘラ削りが施される。67～69はいわゆる箱坏である。70は壺である。71は壺である。



第26図 包含層出土遺物(1)



第29圖 包含層出土遺物(2)

口端部がくの字状に屈曲することが特徴で、金属器模倣の塊であると考えられる。口縁端部のみに使用痕が認められ、倒墜の状態で転用されていたと推測できる。8世紀前半頃に位置付けられるであろう。土師器 72~76は長財窯であり、口縁部の形態からIV期末葉~V期初葉に位置付けられる。72は口縁部と肩部の境に粘土紐を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。75は口縁部内面に浅い沈線状の段をもつことが特徴である。

(3) 平安時代の遺物（第29図77・第30図78~89、写真図版15~1）

須恵器 77は碗である。内外面ともに褐色を呈す。内面に粘土紐痕が残る。

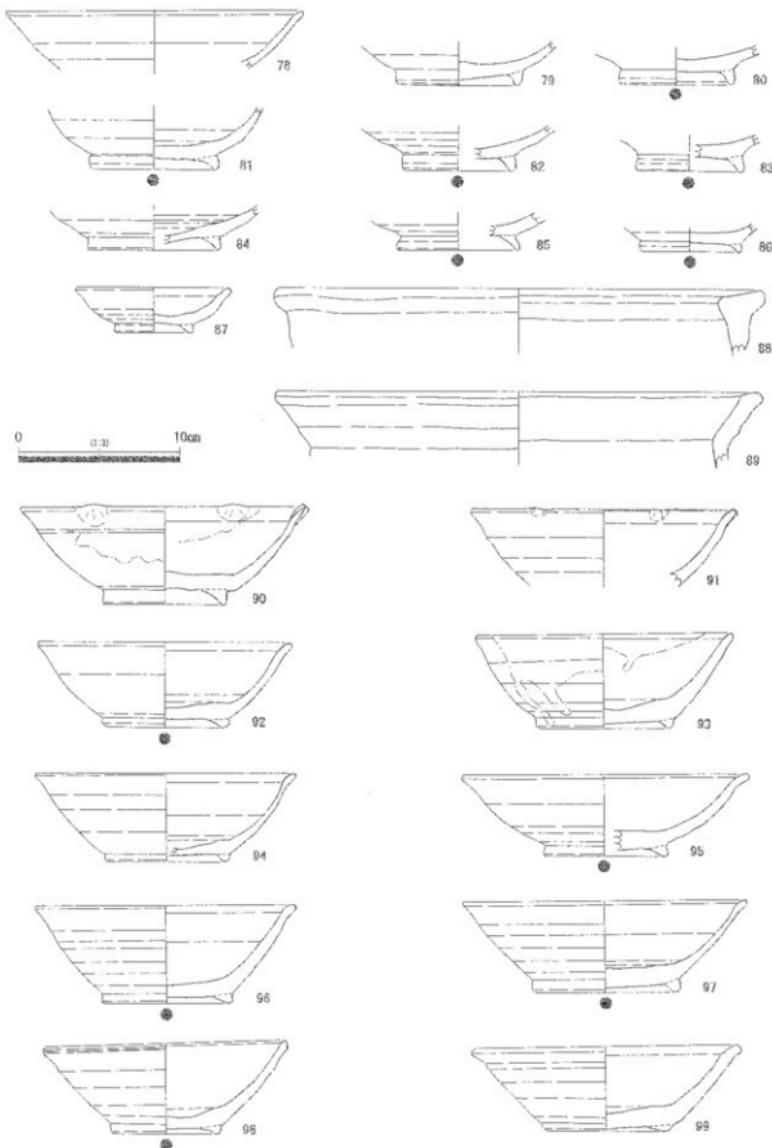
灰釉陶器 78は碗である。外面上にハケ塗りで施釉されている。内面は自然釉を被る。79は碗である。高台を棒状工具による回転ナデによって貼り付けている。施釉の有無は不明である。O53号窯期並行期に位置付けられよう。80は碗である。底部外面の中心にのみ糸切り痕を残す。施釉の有無は不明である。灰釉陶器III期-2に比定できる。82・83は碗である。82は底部外面に糸切り痕を残す。いずれも東遠諸窯で生産されたもので10世紀前半に位置付けられる。83は高台がやや内湾しながら下方へ延びる。底部外面に糸切り痕が残る。10世紀後半代に位置付けられよう。84は碗である。腹が張り、高台の断面は三角形を呈す。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて遠江諸窯の製品であろう。85は碗である。底部外面に糸切り痕が残る。胎土から東遠諸窯で生産されたものと考えられる。10世紀後半代に位置づけられよう。86は碗である。底部外面中央部に糸切り痕を残す。焼成不良で器面全面が灰白色を呈す。11世紀前半に位置付けられよう。87は小碗である。腰が張り、高台は丁寧なつくりで底部外面はナデ調整が施されている。百代寺窯期並行期に位置付けられ、胎土からみて東遠諸窯の製品の可能性がある。

土師器窯 88はいわゆる滑綽削窯である。口縁部と体部の境に粘土紐の痕跡がみられる。11世紀前半に位置付けられよう（北村 2001）。89は三河型窯である。口唇部は平坦に仕上げられ、口縁部外面に沈線状の瘤みが残る。10世紀前半代に位置付けられる。

(4) 中世の遺物（第30~33図90~157、写真図版13~14）

山茶碗（第30~33図） 90~131は碗、132~143は小碗、144~155は小皿、156は子持器台である。90~97・99~102・104・108~112・114~118・121・123・128~132・136・141・145・147~153は渥美・湖西型山茶碗、98はいわゆる北部系の山茶碗で、胎土は泥質で砂礫をほとんど含んでいない。138・146・155は尾張型山茶碗であるが、胎土から常滑古窯群で生産された可能性がある。103・113・119・122・124~126・133~135・137・142・144・154は東遠型山茶碗である。以下、個別に詳細を記す。

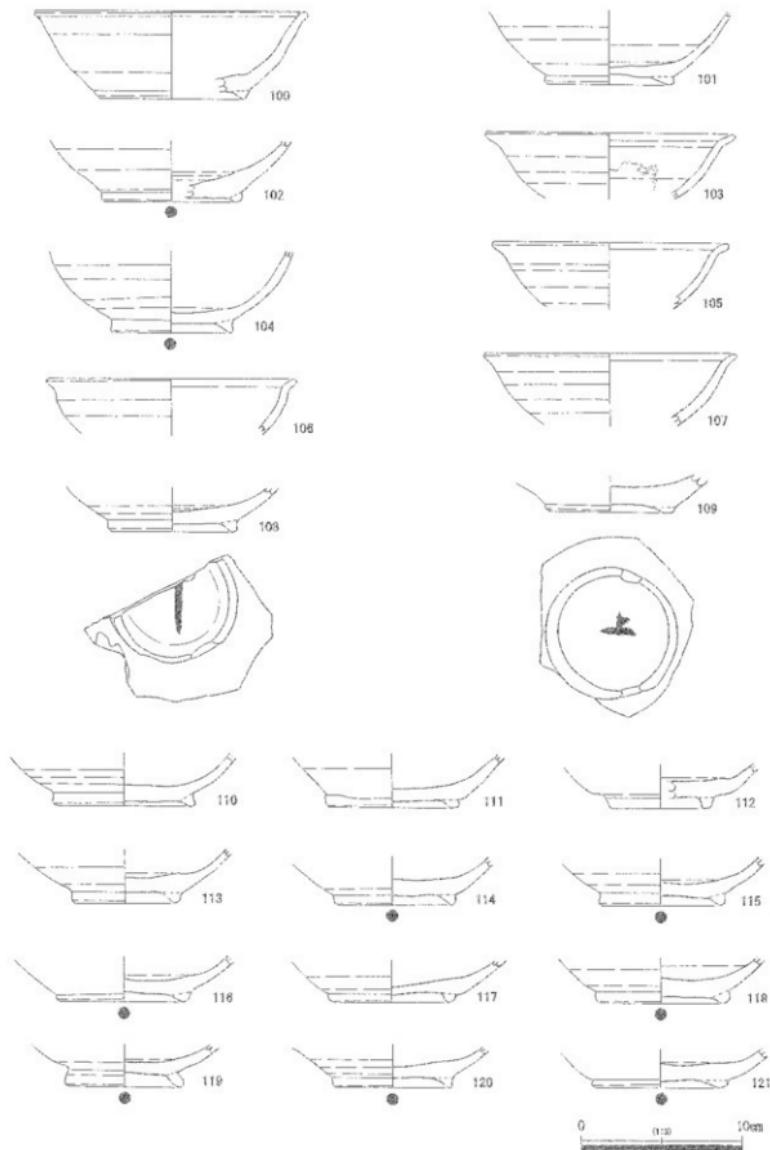
碗（第30~32図） 90は輪花碗で、漬け掛けにより施釉されている。漬け掛け施釉の範囲に、輪花が指サエによって付けられる。漬け掛けが3カ所にみられることから、輪花の数も同数であると考えられる。底部内面には煤が付着する。山茶碗I期-1に比定できよう。91は輪花碗で、口縁部にわずかに指サエによる輪花が認められる。92は底部内面に使用痕、高台に羽痕が認められる。山茶碗II期-1に比定できる。93は高台に圧痕は認められない。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。口縁部内外面上位に煤が付着する。山茶碗II期-1に比定できよう。94は高台にはスノコ状圧痕が認められ、底部外面の糸切り痕をナデ消している。底部内面中央部と口縁部内面にわずかに煤が付着する。95は底部外面に糸切り痕が残るが、高台には圧痕は認められない。山茶碗III期-1に比定できる。96は内面に煤が付着し、また破面の一部にも同様に煤が確認できる。破碎後に被焼したと考えられる。山茶碗III期-1に比定できる。97は高台に羽痕、底部内面に使用痕が認められる。山茶碗II期-1に比定できる。98は高台には多くの羽痕が認められる。底部外面の糸切り痕はナデ消されるが、僅かに残る。胎土は砂礫をほとんど



第30図 包含層出土遺物(3)

含まない精良であることから、いわゆる北部系の山茶碗であると考えられ、本遺跡唯一の出土例である。藤沢良祐氏の瀬戸古窯群の山茶碗編年第5型式に比定できよう（藤沢 2003）。99は底部外面の糸切り痕はナデ消されているが、高台には初痕が認められる。また、口唇部内面に回転ナデによる段をもつ。山茶碗Ⅲ期-1に比定できる。100は高台に初痕が残る。Ⅲ期-1に比定できよう。101は体部上位の器壁は薄く丁寧なつくりで、高台には圧痕が認められない。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅲ期-1に比定できる。102は高台が扁平で、初痕が認められる。底部内面には煤が付着している。山茶碗Ⅲ期-2に比定できよう。103は体部内面に漆と考えられる光沢をもつ固体が付着している。口縁部が弱く外反する。104は高台に圧痕は認められず、丁寧なつくりである。底部外面にはわずかに糸切り痕が残る。山茶碗Ⅰ期-1に比定できる。105～107は施釉が認められず、内面に自然釉を被る。口縁部が外反することが特徴である。產地は不明である。108は底部外面の糸切り痕はナデ消され、その上に「！」墨書きが認められる。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう。109は高台に初痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。底部外面中央部に「上」が墨書きされている。山茶碗Ⅲ期-1に比定できよう。110は底部内面に使用痕が認められる。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。体部中央と口縁部内面に煤が付着する。111は底部内面に使用痕が認められる。高台はやや潰れ扁平となるが、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅳ期-1に比定できる。112は高台が厚く、台形を呈する。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅱ期-1に比定できる。113は高台には初痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。高台外面と底部内面に煤が付着する。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう。114は高台には初痕が、底部内面には使用痕が認められる。底部外面中央部にのみ糸切り痕が残る。山茶碗Ⅳ期-1に比定できる。115は高台には初痕が、底部内面に使用痕が認められる。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう。116は高台には初痕が、底部外面には糸切り痕が残る。内・外縁ともに煤が付着している。山茶碗Ⅳ期-1に比定できよう。117は高台には初痕が認められず、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。Ⅲ期-1に比定できよう。118は底部外面中央部には糸切り痕を残し、高台には初痕が認められる。山茶碗Ⅲ期-1に比定できよう。119は高台には圧痕が認められず、丁寧なつくりである。底部内面には煤が付着する。山茶碗Ⅰ期-1に比定できよう。120は高台に圧痕は認められない。山茶碗Ⅰ期-2に比定できる。121は高台が低く扁平で、初痕が認められる。底部外面の糸切り痕は未開闢である。122は高台が比較的丁寧なつくりで、初痕は認められない。底部外面中央部にのみ糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう。123は底部内面全面と破面に煤が付着している。破壊した後に被熱したと考えられる。山茶碗Ⅳ期-1に比定できる。124は底部内面に使用痕が認められる。底部外面に糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期-1に比定できよう。125は底部内面に使用痕が残る。山茶碗Ⅲ期-1に比定できよう。126は底部外面の糸切り痕がナデ消され、圧痕は認められない。器面は褐色を呈することが特徴で、宮口古窯群で生産されたと考えられる。山茶碗Ⅰ期-2に位置づけられる。128は底部中央に薄く煤が付着する。山茶碗Ⅲ期-1に比定できる。129は高台には初痕がみられ、底部外面中央には糸切り痕が認められる。底部内面は生焼けで褐色を呈する。山茶碗Ⅱ期-1に比定できる。130は底部に初痕を残す。山茶碗Ⅳ期-1に比定できる。131は底部内面に使用痕が認められ、外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅱ期-1に比定できる。

小碗（第32図） 132は高台が扁平であるが、圧痕は認められない。山茶碗Ⅰ期-2に比定できる。133は底部外面に糸切り痕が残り、宛輪は認められない。胎土・色調からみて東遷型山茶碗であるが、掛川市清ヶ谷古窯群の製品であると推測される。134は高台にスノコ状圧痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて浜松市宮口古窯群で生産されたものと考えられる。山茶碗Ⅰ期-1に位置付けられよう。135は底部内面に使用痕が認められ、外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて東遷型山茶碗の可能性が高い。12世紀後半代に位置づけられよう。136は底部内面に使用痕が認めら



第31圖 包含層出土遺物(4)

れる。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗である。山茶碗II期-1に比定できる。137は高台が長方形形状に角をもち、底部内面には使用痕が認められる。胎土からみて東濃型山茶碗であると考えられる。山茶碗I期-1に比定できる。138は底部外面の糸切り痕はナデ消され、内面には使用痕が認められる。胎土からみて尾張壺山茶碗であるが、渥美古窯群で生産されたものと考えられる。1b型式に比定できよう。139は高台が一部変形し、いびつな形を呈する。高台の糸切り痕はナデ消され、底部内面には全面に自然釉が被る。焼成時に一番上に重ね焼きされていたと考えられる。山茶碗I期-1に比定できる。140は底部外面の糸切り痕はナデ消され、底部内面に使用痕が認められる。焼成不良で褐色を呈す。山茶碗I期-2に比定できよう。141は低く扁平な高台に粗痕が認められ、底部内面には使用痕がみられる。山茶碗I期-2に比定できよう。143は底部内面に使用痕が認められる。山茶碗II期-1に比定できる。

小皿（第32図） 144は底部に糸切り痕を残し、また体部から底部にかけて煤が付着する。山茶碗II期-1に比定できよう。145は底部内面全面に自然釉が被る。器高は高く、底部外面に糸切り痕が僅かに残る。山茶碗II期-1に比定できる。146はわずかに高台が残る。2型式に比定できよう。147は体部中位に屈曲点をもち、底部内面にナデ調整が認められる。山茶碗II期-1に比定できる。149は底部外面の糸切り痕はナデ消されているが、わずかに痕跡が残る。山茶碗II期-1に比定できよう。150は底部内面に使用痕が、外面に糸切り痕が認められる。山茶碗II期-1に比定できる。151は口縁部内面に僅かに段が認められる。底部外面には糸切り痕が残る。山茶碗III期-1に比定できよう。152は底部外面上に明瞭に右回転の糸切り痕が残る。山茶碗II期-1に比定できる。153は体部外面上に墨書きが施されている。内面には中央部から口縁部に向かって書きられ、止めや払いもみられることから墨字層によるものと考えられる。これらは文字としては判読できず、内容を明確にできない（註1）。山茶碗II期-1に比定できる。154は底部の一部に糸切り痕が残り、口唇部に僅かに煤が付着している。山茶碗III期-1に比定できよう。155は底部外面上に糸切り痕を残し、底部内面にナデが施される。6a型式に位置付けられる。156は子持器台の杯部である。内面全面に自然釉が被る。

鉢（第33図） 157は大平鉢ないし片口鉢であると考えられる。やや丸味をもって直線的に立ち上がり、体部上位までヘラ削りが認められる。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗であろう。

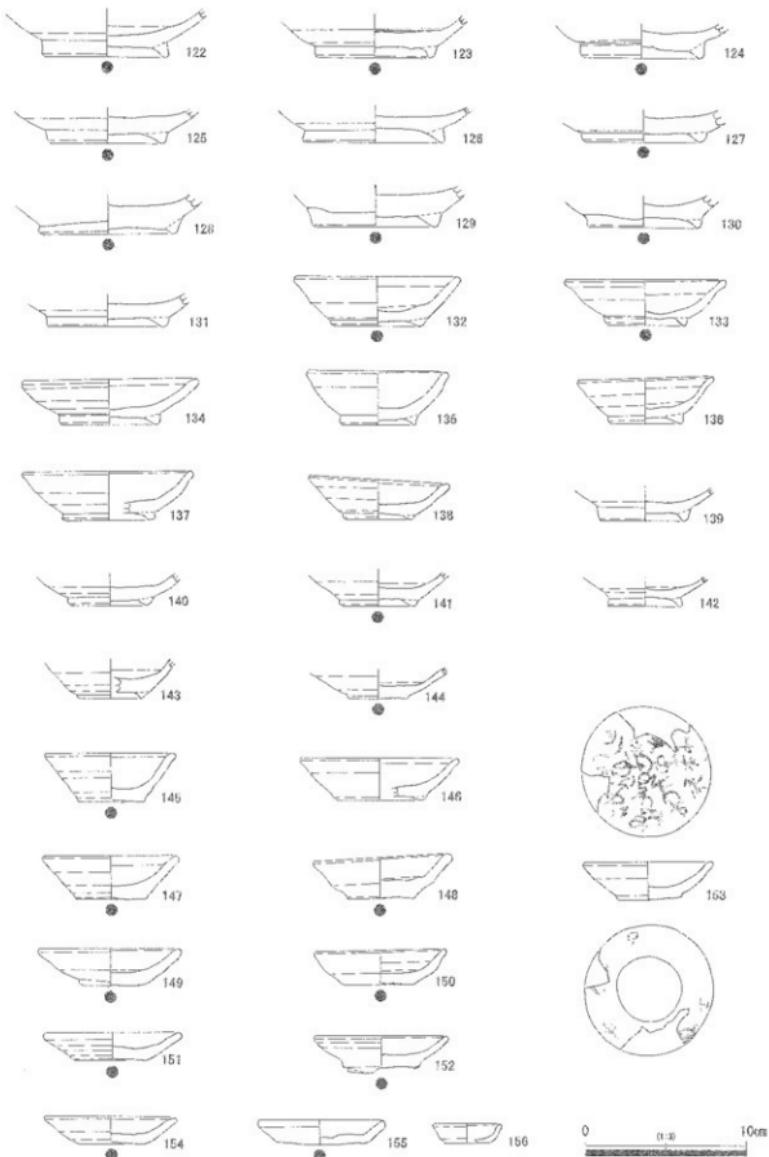
⑤ その他の遺物（第33・34図158～175、写真図版15-2・3）

青磁 158は青磁碗である。目の粗い櫛歯状工具で、左から右へ器面を削り、施文している。内面は雑文だが、口縁部上位に浅い沈線が巡っている。

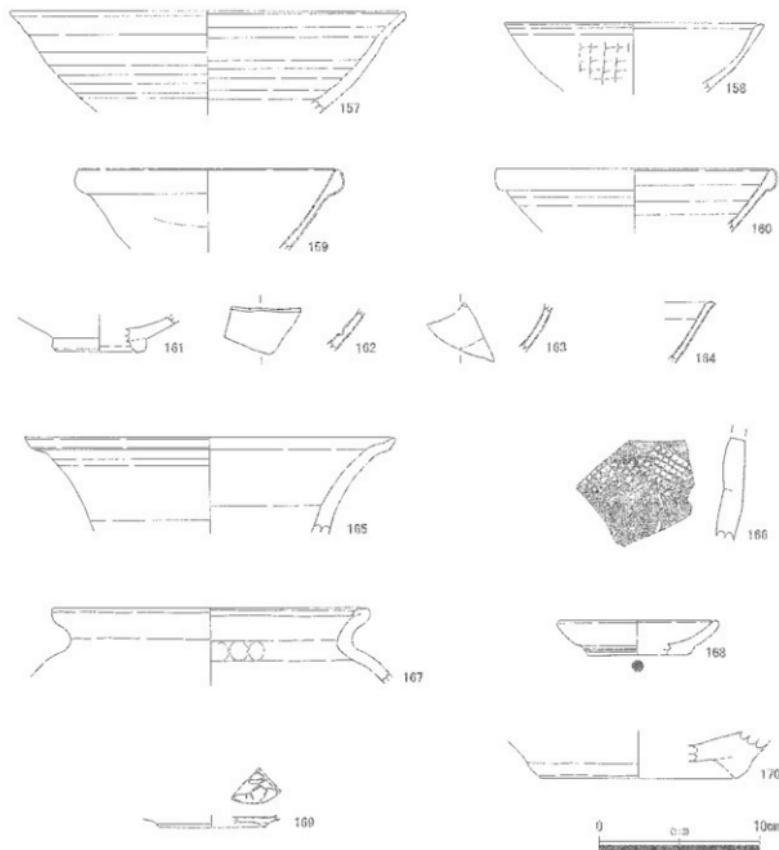
白磁（159～164） 159・160は碗IV類、163は碗V類である（山本 1995）。161は高台のみ残存しているため、器種が判断としない。高台はヘラ削りによって整えられ、厚く仕上げられている。体部が外へ向かって延びているため、山本信夫氏の貿易陶磁分類（山本 1995）碗VI類であると考えられる。いずれの資料も12世紀代に位置づけられる。

その他（165～170） 165は広口長颈瓶で、渥美古窯群ないし在地産の可能性があるが明確でない。破断面は灰色だが、外面は黒色を呈し、器面に黄土を塗布している可能性がある。166は渥美古窯群窯の甕である。体部に格子目状の叩き目が認められる。167は土師質土器類である。いわゆる伊勢型甕で、口縁部は比較的丁寧につくられている。11世紀後半から12世紀前葉に位置付けられる。168は土師質土器甕である。ロクロ成型品で、底部に糸切り痕を残す。169は瓦器甕である。小破片で詳細は不明であるが、低く薄い高台が貼り付けられ、底部内面にはわずかに暗文が施される。縦内からの搬入品であろう。

土製品（171～173） 171・172は管状土錠、173は轆羽口である。171は大型であり、172は小型でいずれも土師質である。173は先端部に向かってややすぼまる形態で、スサ入りの粘土により成形されている。



第32図 包含層出土遺物(5)

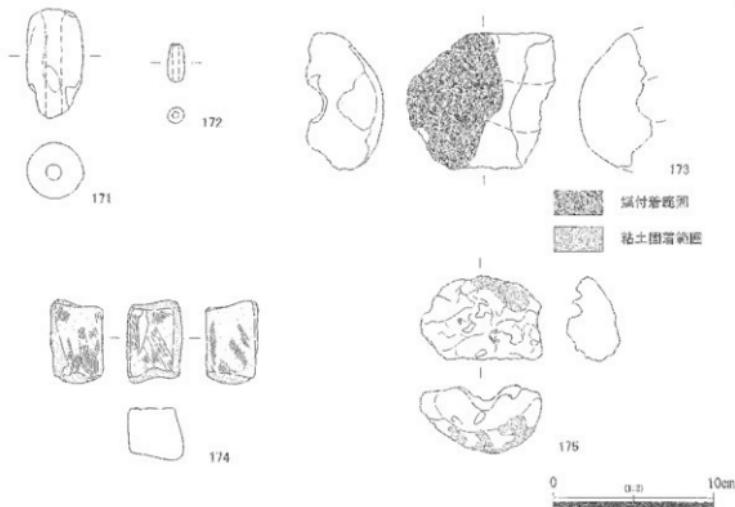


第33図 包含層出土遺物(6)

内面には僅かに鋼綫痕跡が確認でき、芯棒に巻き付けて成形している。先端部外面には煤が付着する。復元送風口径2.6cm、外径9.2cm、残存長9.0cmで、重量感、厚みがある。7世紀以降に先端部がすぼまる形態に規格化されるようである（安間 2008）。羽口の送風口径や形態から古代に位置づけられる可能性があるが、明確でない。

磁石 174は淡黄色を呈する砂岩で、3面を磁面としている。磁面は平坦またはやや外へ向かって膨らんでいる。

鉄鋤 175は楕円錐治鋤で、表面には凹凸がみられる。また、一部に木炭が認められ、底部には灰白色を呈する炉床土が固着する。長さ5.15cm、幅7.95cm、重さ135gを測り、磁着度は弱い。



第34図 包含層出土遺物(7)

第4章　まとめ

本書には、試掘・確認調査と本調査の成果を収録した。その成果をまとめ、結語とする。

試掘・確認調査 太田川両岸の約55,000m²を対象に試掘・確認調査を行った。1区（右岸）では、從来西向遺跡と考えられていた範囲よりやや南に広がることを確認した。3区（左岸）は、西向遺跡包蔵地の隣接地にあたるが、遺跡としては認知されていなかった。今回の調査で改めて遺跡が存在することが明らかとなり、西向遺跡とは別に「富里遺跡」として遺跡登録された。この遺跡も西向遺跡とほぼ同時期の古墳時代から中世に位置づけられる。太田川や原野谷川が江戸期に改修される以前には同じ集落を形成していたとも考えられよう。

古代～中世 第1遺構面では掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝状造構3条、土器集中1カ所を検出した。今回の調査で遺物については最も多く出土しているが、それに比較して遺構はわずかであった。しかし、土器類は生活痕跡を示す使用痕や煤が付着している例が多く、集落域が広がることを予想させる。また山茶碗は湖西・渥美産が主体的で、その他の產地のものは客体的であった。この傾向は本遺跡だけではなく、他の遺跡でもみられるようで（藤沢 2008）、一定の流通圏が存在していただろう。

3号溝状造構のみ古代（8世紀中頃）に比定でき、須恵器壊・皿・瓢、土師器甕が覆土上層からまとまって出土した。特に須恵器甕は故意に口縁部を欠き、破碎された状態で出土し、何らかの儀礼的行為が行われたと考えられる。

古墳時代 第2遺構面では、掘立柱建物跡3棟、柱穴・小穴38基、土坑7基、溝状造構18条、性格不明造構3基を検出した。時期を限定できなかったが、古墳時代中期から終末期の遺構面と想定した。西向遺跡1次調査では、弥生時代後期の遺物が出土しているが、今回の調査では確認していない。

古墳時代中期末葉から終末期には、福田・浅羽地域では周辺に元島遺跡・古新田遺跡、北野遺跡があるが、いずれの遺跡でも須恵器の出土量が多く、土師甕も貯蔵具・供脾具などを描いている。本遺跡の状況とは対照的である。本遺跡は層層下位の集落で、生活域からやや離れていることが考えられる。

遺跡の広がりと性格 今回の調査は、太田川の河川改修工事に伴い行われており、調査対象となった範囲は南北に長く、限定的である。包含層出土遺物や遺構の検出地点も調査区西側に集中して確認できた。のことから本遺跡の中心域は調査対象に含まれなかった調査区外西方に存在することが予想される。

また、出土遺物からは龍羽口・砥石・鉄滓・埴輪が特出でき、遺跡の評価と関わる。龍羽口は、包含層出土のため時期を限定できなかったが、その形態から古代以降で、中世までは下らないと考えられる。周辺に奈良・平安時代の鍛冶炉が存在する可能性がある。砥石はこの羽口・鍛冶炉に関連するのかは不明である。

埴輪に関しては遺跡内や周辺に古墳がなく、周囲から流出したものと考えた。推測の域を出ないが、近接して古墳やそれに類する墳墓が存在した可能性もある。そう考えると、古墳時代前期には近接地に墓域が広がっていたことが推測される。豊田原台地南部に分布する古墳・古墳群との関係も興味深い。

本遺跡は4世紀後半頃から始まり、まず墓域が形成され、その後古墳時代中期末葉から本格的に集落が形成され、古代には鍛冶炉・集落・中世にも集落が広がり、13世紀後半には集落が衰退していくと考えられる。西向遺跡は今回の試掘・確認調査を行った範囲だけでも約30,000m²を遺跡範囲として確認しており、さらに西側へ遺跡が広がることは確実である。今回はその一部を調査したに過ぎない。今後の調査により、西向遺跡の実態がさらに把握されることを期待したい。

報告書作成に際して、以下の方々・団体機関から御指導・御助言を賜りました。末筆ですが、記して感謝申し上げます。

河合 修 鈴木一有 鈴木敏則 田村謙太郎 堀井俊三 日吉康浩 浜松市立内山真龍資料館（五十音順・敬称略）

第2表 出土遺物一覧表

登 録 番 号	基 本 形 状	出土地点	グリッド	種 類	種 別	部 位	残存率 (%)	法 規 (cm)		高古 性 (解説)	色 調 (外觀)
								日共 高さ	底径		
1	TPII-6	良吉層		土器	高所	口縁～脚部	36%	15.0	14.8	—	11.2 に高い貴重 (10YR7/4)
2	TPII-5	包含層		土器	高所	底～底部	55%	—	(4.3)	—	5.0 灰白 (2.5Y7/1)
3	TPU-6	包含層		土器	高所	底～底部	32%	—	(2.6)	—	7.5 灰白 (2.5Y7/1)
4	TPU-1	包含層		土器	高所	口縁～底部	—	(24.0)	(6.65)	—	に高い貴重 (10YR7/5)
5	SP1	墨土中層		土器	高所	口縁～底部	70%	16.4	5.1	—	7.2 灰白 (GY7/1)
6	SD1	墨土下層・包含層	D-G-2	須恵器	瓶	口縁部	(15%)	2.0	—	—	灰 (N6)
7	SD1	墨土・包含層		須恵器	片舟	口縁～底部	20%	(7.0)	2.75	—	灰 (N6)
8	SK1	墨土下層		山茶碗	碗	口縁～底部	72%	(19.0)	5.35	—	6.5 褐色 (2.5Y6/1)
9	SK1	墨土層		山茶碗	碗	底～底部	60%	—	(4.3)	—	8.0 灰白 (2.5Y7/1)
10	SK1	墨土下層		山茶碗	小瓶	口縁～底部	70%	9.75	2.8	—	4.7 灰白 (GY7/1)
11	SD1	墨土下層		山茶碗	碗	底～底部	40%	—	(2.5)	—	8.15 灰白 (2.5Y7/1)
12	SD1	排水溝・包含層		須恵器	甕	口縁～底部	(30%)	—	11.0	—	灰白 (N7)
13	SD1	排水溝・包含層	D-G-3	須恵器	瓶	底～底部	(30%)	—	(5.5)	—	(12.4) 黒褐 (2.5Y6/1)
14	SD1	墨土下層		山茶碗	碗	外～底部	45%	—	(2.65)	—	7.0 灰白 (2.5Y7/1)
15	SD1	墨土		山茶碗	碗	底～底部	(40%)	—	(2.3)	—	7.5 灰白 (N6)
16	SD2	桜木町(西)・墨土		須恵器	片舟	口縁～底部	40%	(12.8)	3.6	18.0	— 灰 (N5)
17	SD2	墨土上層		須恵器	片舟	口縁～底部	50%	(18.5)	4.5	—	灰白 (5Y7/1)
18	SD2	墨土上層		須恵器	瓶	口縁～底部	(40%)	—	(31.5)	—	褐色 (10YR6/1)
19	SD2	墨土上層		須恵器	瓶	底～底部	(90%)	—	(20.5)	—	灰白 (N7)
20	SD2	墨土上層		須恵器	瓶	底～底部	10%	(16.5)	(2.5)	—	褐色 (2.5Y6/1)
21	SD3	墨土上層		須恵器	瓶	口縁～底部	25%	(18.0)	2.95	(18.0)	— 黄灰 (2.5Y6/1)
22	SD3	墨土上層		須恵器	瓶	口縁～底部	15%	(18.0)	2.8	(14.0)	— 黄灰 (2.5Y6/1)
23	SD4	墨土上層		須恵器	瓶	口縁～底部	(10%)	(22.0)	(5.5)	—	に高い褐 (7.5Y7/5)
24	土器等P1			土器等	片舟	口縁～脚部	55%	12.2	15.4	—	6.25 灰白褐 (10YR6/2)
25	土器等C1			土器等	片舟	口縁～脚部	(20%)	—	(16.0)	—	に高い貴重 (10YR6/2)
26	土器等中1			土器等	片舟	口縁～脚部	(30%)	14.0	(11.0)	—	灰白褐 (10YR6/2)
27	土器等C1			土器等	片舟	口縁～脚部	(80%)	—	(8.5)	—	(8.5) に高い褐 (2.5Y6/4)
28	土器等中1			土器等	片舟	口縁～脚部	(100%)	—	(7.0)	—	6.0 に高い貴重 (10YR7/3)
29	SK5	墨土上層		土器等	片舟	口縁～脚部	—	8.5	7.9	—	に高い貴重 (10YR5/5)
30	SK8	墨土中層		土器等	ミニチャア 土器	脚部	40%	(7.4)	3.6	(1.5)	— 淡黄 (2.5Y7/3)
31	SD12	墨土		須恵器	片舟	口縁～脚部	20%	(2.5)	(2.1)	—	灰 (N6)
32	SD12	墨土		須恵器	片舟	口縁～脚部	20%	(12.0)	—	(11.1)	— 灰白 (2.5Y6/1)
33	SD12	墨土下層		須恵器	瓶	底～底部	15%	—	(4.5)	—	7.1 灰白 (2.5Y7/1)
34	SD12	墨土下層		須恵器	瓶	底～底部	30%	—	(2.8)	—	6.85 灰白 (2.5Y7/2)
35	SD12	墨土下層		須恵器	瓶	口縁～底部	30%	(17.2)	5.1	—	(7.8) 灰白 (2.5Y7/1)
36	SD12	墨土下層		須恵器	瓶	口縁～底部	40%	(16.5)	5.1	—	灰白 (2.5Y7/1)
37	SD12	墨土下層		須恵器	瓶	口縁～底部	10%	(17.4)	(3.7)	—	灰白 (2.5Y7/1)
38	SD25	墨土上層		土器等	片舟	口縁～脚部	(90%)	—	(1.5)	—	に高い貴重 (10YR7/3)
39	SD25	墨土	G-1	須恵器	片舟	口縁～脚部	25%	(2.6)	3.6	—	灰 (GY6/1)
40	SD25	墨土	G-1	土器等	片舟	口縁～脚部	—	—	(2.2)	—	灰 (2.5Y7/8)
41	SD25	墨土上層		土器等	高所	脚部	—	—	(6.4)	—	灰・黄褐 (10YR6/3)
42	SK1	墨土下層		土器等	須恵器	口縁部	(25%)	(25.9)	(3.5)	—	に高い貴重 (10YR7/4)
43		包含層	C-6	須恵器	平盤	口縁部	(25%)	(12.5)	(5.4)	—	灰白 (GY7/1)
44		包含層	G-1	須恵器	杯	底～口縁部	10%	(11.0)	(3.6)	—	灰 (N6)
45		包含層	G-1	須恵器	杯	口縁～底部	15%	—	(2.2)	—	灰 (GY6/1)
46		包含層	D-3	須恵器	杯	口縁～底部	15%	(8.2)	(2.4)	—	灰 (GY6/1)
47		包含層	F-1	須恵器	杯	口縁～中盤	5%	8.4	(2.0)	—	灰 (N5)
48		包含層	E-2	須恵器	杯	口縁部	5%	(7.5)	(1.5)	—	灰 (N6)
49		包含層	G-1	土器等	杯	口縁～底部	—	(1.63)	(4.0)	—	に高い貴重 (10YR6/4)
50		包含層		土器等	高所	脚部	(30%)	—	(7.6)	—	(11.7) に高い貴重 (10YR7/4)
51		排水溝(西)		土器等	高所	脚部	(40%)	—	(8.5)	—	に高い灰 (7.5Y7/1)

番号	造 構	出土地点	グリッド	種 類	器 形	部 位	残存率 (%)	寸 法 (cm)			色 調 (外面)	
								口径	腹高	底限		
52	包含層			土師器	高环	底～部部	(20%)	—	(7.5)	—	に赤い斑 (2.5YR6/3)	
53	包含層			土師器	高环	脚部	(50%)	—	(6.1)	—	に赤い斑 (2.5YR6/6)	
54	包含層	F-1		土師器	高环	脚部	(60%)	—	(6.6)	—	灰 (5YR6/5)	
55	包含層	H-5		土師器	高环	脚部	(50%)	—	(5.6)	—	に赤い斑 (1.5YR6/4)	
56	包含層			土師器	高环	脚部	(90%)	—	(7.0)	—	灰白 (10YR7/1)	
57	包含層	G-1・2		土師器	高环	脚部	—	—	(5.9)	—	に赤い斑 (2.5YR5/4)	
58	包含層	G-2		土師器	高环	脚部	(50%)	—	(6.7)	—	に赤い斑 (1.5YR7/4)	
59	包含層	F-2		陶器	瓶形 埴輪?	夾帶部	—	—	—	—	に赤い斑 (10YR7/3)	
60	包含層	G-2		土師器	壺	LII腰～脚部	15%	(11.2)	—	(4.0)	—	に赤い斑 (10YR7/2)
61	包含層	G-2		土師器	ミニチュア ニシア	作～底部	70%	—	(2.9)	2.2	—	に赤い斑 (10YR6/3)
62	包含層			土師器	壺	把手	—	—	(5.9)	—	灰 (5YR7/6)	
63	排水溝(西)			須賀器	折腹	天井～口縁部	60%	(16.0)	3.3	—	灰 (10YR6/1)	
64	包含層	F-1		須賀器	折腹	天井～口縁部	70%	14.1	2.8	—	灰 (5YR6/1)	
65	調 土			須賀器	折腹	天井～口縁部	90%	(13.4)	3.0	—	灰白 (5YR7/1)	
66	包含層	調土・F-1		須賀器	外腹	天井～口縁部	95%	17.9	1.5	—	灰白 (5YR7/1)	
67	包含層	D-3		須賀器	脚部	口縁～脚部	20%	(13.2)	(3.1)	10.1	—	灰 (N6)
68	排水溝(西)			須賀器	外身	口縁～底部	45%	(12.4)	2.6	(8.4)	—	灰 (N6)
69	包含層			須賀器	外身	口縁～底部	15%	(13.2)	2.2	(10.6)	—	灰 (N6)
70	包含層	E-2		須賀器	脚部	口縁～底部	5%	(16.4)	(2.3)	(13.7)	—	灰 (2YR6/1)
71	包含層	C-3		須賀器	脚部	LII腰～脚部	10%	(18.0)	(4.4)	—	灰 (5YR6/1)	
72	排水溝(西)			土師器	瓦瓶	口縁～頸部	—	(23.0)	(6.5)	—	明赤 (5YR5/5)	
73	包含層			土師器	瓦瓶	LII腰～脚部	—	(17.5)	(4.7)	—	に赤い斑 (1.5YR7/3)	
74	法面			土師器	瓦瓶	口縁部	(10%)	(20.7)	(4.0)	—	に赤い斑 (7.5YR3/4)	
75	包含層			土師器	瓦瓶	口縁～脚部	—	(19.5)	(2.8)	—	灰黄褐 (10YR5/2)	
76	包含層	F-2		土師器	瓦瓶	脚部	—	—	(1.85)	6.6	—	に赤い斑 (10YR6/3)
77	包含層	F-2～4		須賀器	壺	体部～底部	—	—	(21.4)	—	—	黒褐 (7.5YR3/1)
78	包含層			須賀器	脚部	口縁～脚部	(10%)	(18.0)	(3.5)	—	灰白 (N7)	
79	包含層	E-3		灰陶器	壺	体～底部	20%	—	(2.4)	—	(6.8)	灰白 (2.5Y7/1)
80	包含層	D-2		灰陶器	壺	体～底部	10%	—	(1.9)	—	(5.5)	灰白 (5Y7/1)
81	包含層	D-2		灰陶器	壺	体～底部	30%	—	(4.7)	—	7.5	灰 (5Y6/1)
82	包含層	H-2		灰陶器	壺	体～底部	10%	—	(2.5)	—	(6.4)	灰 (5Y6/1)
83	細削土			灰陶器	壺	体～底部	10%	—	(1.8)	—	(5.0)	灰 (5Y6/1)
84	包含層			灰陶器	壺	体～底部	25%	—	(2.7)	—	(7.3)	灰白 (N7)
85	包含層	F-2		灰陶器	壺	体～底部	10%	—	(1.8)	—	(7.2)	灰 (5Y6/1)
86	包含層	F-2		灰陶器	壺	体～底部	40%	—	(1.5)	—	6.0	灰白 (2.5Y7/1)
87	包含層	G-2		灰陶器	小壺	口縁～底部	20%	(9.3)	2.75	—	灰白 (2.5Y7/1)	
88	包含層	E-2・F-3		土師器	滑腹型要	口縁部	(10%)	(34.4)	(3.7)	—	灰黃褐 (10YR6/2)	
89	包含層	F-2		土師器	三河型要	口縁～脚部	—	(29.0)	(4.1)	—	に赤い斑 (10YR6/3)	
90	包含層	F-3		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	60%	(17.2)	6.2	—	7.3	灰白 (2.5Y7/1)
91	包含層	D-2		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	15%	(15.95)	(4.7)	—	—	灰白 (2.5Y7/1)
92	包含層	D-2・F-2		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	30%	(15.4)	5.2	—	(7.0)	灰白 (2.5Y7/1)
93	包含層	E-2		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	80%	15.45	5.8	—	7.8	灰白 (2.5Y7/1)
94	包含層			山茶瓶	花瓶	口縁～底部	40%	(15.8)	—	—	灰白 (N7)	
95	包含層			山茶瓶	花瓶	口縁～底部	20%	(17.1)	5.0	—	(7.4)	灰白 (2.5Y7/1)
96	包含層	G-2		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	15%	(16.6)	6.0	—	(7.6)	灰白 (2.5Y7/1)
97	包含層			山茶瓶	花瓶	体～底部	30%	—	(3.0)	—	7.4	灰白 (10YR7/1)
98	包含層	F-2・3		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	75%	14.5	9.7	—	6.2	灰黃 (2.5Y7/1)
99	包含層	E-2		山茶瓶	花瓶	口縁～底部	60%	16.0	9.3	—	7.0	灰白 (2.5Y7/1)
100	排水溝(西)			山茶瓶	花瓶	口縁～底部	20%	(16.4)	5.4	—	(8.8)	灰白 (2.5Y7/1)
101	包含層			山茶瓶	花瓶	体～底部	40%	—	(4.5)	—	(7.6)	灰白 (2.5Y7/1)
102	包含層	D-3		山茶瓶	花瓶	体～底部	20%	—	(3.9)	—	(8.1)	灰白 (2.5Y7/1)
103	包含層	F-2		山茶瓶	花瓶	口縁～体部	10%	(15.0)	(4.0)	—	—	灰白 (2.5Y6/1)
104	包含層			山茶瓶	花瓶	体～底部	40%	—	(5.0)	—	7.15	灰白 (2.5Y7/1)
105	包含層	F-1		山茶瓶	花瓶	体～底部	50%	—	(1.9)	—	4.4	灰白 (2.5Y7/1)
106	包含層	F-3		山茶瓶	花瓶	口縁～体部	0%	(15.0)	(2.4)	—	—	灰白 (2.5Y7/1)
107	包含層			山茶瓶	花瓶	体～底部	5%	(15.4)	(4.4)	—	—	灰白 (2.5Y7/1)
108	包含層	D-3		山茶瓶	花瓶	体～底部	20%	—	(2.7)	—	(7.2)	灰白 (2.5Y7/1)
109	包含層	C-3		山茶瓶	花瓶	体～底部	30%	—	(1.8)	—	7.1	灰白 (2.5Y7/1)
110	包含層	F-2・3		山茶瓶	花瓶	体～底部	60%	—	3.0	—	6.25	灰白 (5Y6/2)
111	包含層	H-4		山茶瓶	花瓶	体～底部	(50%)	—	(3.1)	—	7.9	灰白 (2.5Y7/1)

番号	遺跡	出土地点	クリッフ	縦 築	横 築	部 位	残存率 (%)	法 墓 (cm)			色 調 (外面)
								口徑	器高	底幅	
112	包含層			山茶窓	窓	体～底部	15%	—	(2.0)	—	灰白 (N8)
113	包含層			山茶窓	窓	体～底部	35%	—	(2.4)	—	6.1 灰白 (N8)
114	包含層			山茶窓	窓	体～底部	55%	—	(3.0)	—	7.2 底白 (S7Y7/2)
115	包含層			山茶窓	窓	体～底部	55%	—	(2.5)	—	6.7 底白 (19YR7/1)
116	包含層			山茶窓	窓	体～底部	85%	—	(3.0)	—	7.8 底白 (SYR7/1)
117	包含層	F-2		山茶窓	窓	体～底部	55%	—	(2.6)	—	7.0 底白 (2.5Y7/1)
118	包含層			山茶窓	窓	体～底部	45%	—	(2.7)	—	7.5 底白 (2.5YR8/1)
119	包含層			山茶窓	窓	体～底部	35%	—	(2.6)	—	5.8 底白 (S7Y7/1)
120	排水溝(西)			山茶窓	窓	体～底部	40%	—	(2.4)	—	7.0 底白 (2.5Y7/1)
121	包含層			山茶窓	窓	体～底部	30%	—	(2.5)	—	7.5 底白 (10YR7/1)
122	包含層			山茶窓	窓	口縫～底部	45%	(17.2)	5.7	—	8.3 底白 (N7)
123	包含層	G-2		山茶窓	窓	体～底部	60%	—	(2.2)	—	(6.3) 底白 (2.5Y7/1)
124	包含層	F-3		山茶窓	窓	体～底部	45%	—	(1.8)	—	7.05 底白 (S7Y7/1)
125	排水溝(西)			山茶窓	窓	体～底部	40%	—	(1.9)	—	6.8 底白 (N7)
126	包含層			山茶窓	窓	体～底部	25%	—	(2.2)	—	(0.5) に多い質化 (10YR7/2)
127	包含層	F-2		山茶窓	窓	口縫～底部	15%	(10.1)	3.6	—	4.8 底白 (2.5Y7/1)
128	包含層	G-3		山茶窓	窓	体～底部	45%	—	(1.7)	—	7.75 底白 (2.5Y7/1)
129	包含層			山茶窓	窓	体～底部	30%	—	(2.2)	—	7.2 底白 (2.5YR7/1)
130	包含層	E-4		山茶窓	窓	底部	35%	—	(1.6)	—	6.65 底白 (2.5Y7/1)
131	包含層	F-2		山茶窓	窓	体～底部	55%	—	(1.4)	—	7.05 底白 (2.5Y7/1)
132	包含層	D-2・E-6		山茶窓	小窓	口縫～底部	60%	(3.3)	3.0	—	5.2 底白 (2.5Y7/1)
133	包含層	C-3・4		山茶窓	小窓	口縫～底部	75%	9.75	2.8	—	4.7 底白 (S7Y7/1)
134	包含層	G-1		山茶窓	小窓	口縫～底部	65%	10.4	2.8	—	5.5 底白 (2.5Y7/2)
135	包含層	E-2		山茶窓	小窓	口縫～底部	30%	(8.4)	3.3	—	4.4 底白 (2.5Y7/1)
136	包含層			山茶窓	小窓	体～底部	40%	—	(2.0)	—	4.5 底白 (N7)
137	包含層	F-2		山茶窓	小窓	体～底部	35%	—	(1.1)	—	(7.1) 底白 (2.5Y7/1)
138	包含層	G-4		山茶窓	小窓	口縫～底部	75%	8.46	2.7	—	4.0 底白 (2.5Y7/1)
139	包含層			山茶窓	小窓	体～底部	30%	—	(1.9)	—	5.0 底白 (2.5YR7/1)
140	包含層	F-4		山茶窓	小窓	体～底部	50%	—	(1.7)	—	4.5 底白 (2.5Y7/1)
141	包含層	F-1		山茶窓	小窓	口縫～体部	10%	14.2	(5.9)	—	底白 (2.5Y7/1)
142	包含層			山茶窓	小窓	口縫～底部	30%	(6.4)	2.8	—	4.3 底白 (S7Y7/1)
143	包含層	G-2		山茶窓	小窓	体～底部	20%	—	(2.2)	—	(4.5) 底白 (2.5Y7/1)
144	包含層			山茶窓	小窓	体～底部	55%	—	(1.8)	3.4	— 底白 (N7)
145	包含層	G-2・H-3		山茶窓	小窓	口縫～底部	40%	(7.5)	3.0	—	底白 (2.5Y7/1)
146	包含層	B-2		山茶窓	小窓	口縫～底部	40%	(9.0)	2.6	—	(5.0) 底白 (2.5Y7/1)
147	包含層	H-6		山茶窓	小窓	口縫～底部	30%	(3.0)	—	—	(4.4) 底白 (2.5Y7/1)
148	包含層	F-2		山茶窓	小窓	口縫～底部	70%	8.3	2.7	4.1	— 底白 (2.5Y7/1)
149	包含層	G-5		山茶窓	小窓	口縫～底部	60%	6.6	2.3	3.8	— 底白 (SYR7/1)
150	包含層上			山茶窓	小窓	体～底部	55%	—	(1.8)	—	底白 (N7)
151	包含層	S-3		山茶窓	小窓	口縫～底部	60%	(8.1)	1.7	4.3	— 底白 (2.5Y7/1)
152	包含層	C-2		山茶窓	小窓	口縫～底部	55%	(5.1)	2.3	(4.6)	— 底白 (2.5Y7/1)
153	包含層	E-3		山茶窓	小窓	口縫～底部	50%	7.6	2.2	4.0	— 底白 (2.5Y7/1)
154	包含層			山茶窓	小窓	口縫～底部	45%	(8.0)	1.5	(4.0)	— 底白 (S7Y7/1)
155	包含層			山茶窓	小窓	口縫～底部	90%	7.5	1.5	5.4	— 底白 (S7Y7/1)
156	包含層			山茶窓	子母管合	口縫～底部	25%	(4.0)	1.2	(2.8)	— 底白 (N8)
157	包含層			山茶窓	鉢?	口縫～底部	10%	(24.0)	(6.2)	—	底白 (10YR7/1)
158	包含層	E-2		雪鉢	鉢	口縫～底部	—	(16.7)	(4.3)	—	黄泥 (2.5Y6/1)
159	排水溝(西)			白磁	瓶	口縫～底部	—	(15.5)	(6.0)	—	底白 (2.5Y7/1)
160	包含層			白磁	瓶	口縫～底部	(15%)	(17.0)	(5.0)	—	— 底白 (N8)
161	包含層	G-3		白磁	瓶	体～底部	—	(2.0)	(2.0)	(5.4)	— 底白 (2.5Y7/1)
162	包含層	G-2		白磁	瓶	体部	—	—	—	—	— 底白 (S7Y7/1)
163	包含層			白磁	瓶	体部	(5%)	—	—	—	— 底白 (2.5Y7/1)
164	包含層	C-5		白磁	瓶	口縫～体部	—	—	(3.0)	—	— 底白 (2.5Y7/1)
165	包含層	C-3・F-2・S		陶器	長頸瓶	口縫～底部	(5%)	(22.7)	(5.1)	—	— 錆斑 (2.5Y5/1)
166	包含層	C-2		陶器	瓶	—	—	—	—	—	— 底白 (5Y5/1)
167	包含層	G-1		土師質土器	鍋	口縫～底部	—	(29.3)	(4.3)	—	— に多い質化 (10YR7/2)
168	包含層			土師質土器	鍋	口縫～底部	50%	(9.5)	2.1	(6.0)	— に多い質化 (SYR4/4)
169	包含層			瓦器	瓶	底部	(15%)	—	(0.7)	—	(6.5) 底 (N4)
170	包含層	F-1		土師器	瓶?	高台	(15%)	—	(2.2)	—	12.0 に多い質化 (2.5Y5/1)

残存率の()は残存部位に対しての比率である。口縫・底縫・高合径の()は推定値、器高の()は残存値である。

註

- 1 浜松市立内山真龍資料館 坪井俊三氏より墨書きについて御教示頂いた。

参考文献

- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪統論」「考古学雑誌」第61巻第2号 日本考古學會
柴田 稔 1986 「北山遺跡」静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
柴田 稔 1987 「北山遺跡」静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
柴田 稔 1987 「椎原山遺跡」静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
加藤芳郎 1993 「浅羽町新堀遺跡の地学的背景」「新堀遺跡」財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
柴田 稔 1993 「古新田」II 遺物編 路面県浅羽町教育委員会
赤塚次郎 1994 「松河戸県式の設定」「松河戸遺跡」愛知県埋蔵文化財センター
市原博文 1994 「自然環境の変遷」「熱海県史 史迹編」原始・古代」静岡県
足立順司 1995 「長崎7町土器について」「長崎遺跡」I (遺物・考古編) 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
植松章八 1995 「静岡県内出土文字資料にみる古代の地名について」「財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 10周年記念論文集」財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
松井一明 1995 「第2節 郡物について 吉墳」「坂尻遺跡」遺物・能括縫 豊津市教育委員会
中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
柴田 稔 1997 「古墳時代の遺跡」「浅羽町史 貢料編1 考古 古代 中世」浅羽町
加藤理文ほか 1998 「元鳥遺跡」I (遺構編 本文) 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則 1998 「桃子北遺跡」遺物編 (本文) 財團法人浜松市文化協会
山本義孝 2000 「中島遺跡・浅羽大圓堤」浅羽町教育委員会
山本義孝 2000 「北ハサマ遺跡」浅羽町教育委員会
山本義孝 2000 「北野遺跡・宮前遺跡」浅羽町教育委員会
赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田郷式の再編」「研究紀要」第2号 勧業愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
北村和宏 2001 「古代「三河型壺」考」「研究紀要」第2号 勧業愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木敏則 2001 「埴輪」「静岡県の前方後円墳」静岡県教育委員会
三河古墳研究会編 2001 「東海の後期古墳を考える」
山本義孝 2001 「十二所居館」浅羽町教育委員会
松井一明 2002 「掛之上遺跡」14・15・19 本文編 静岡県綾井市教育委員会
松井一明 2003 「掛之上遺跡」IX・X 静岡県綾井市教育委員会
真鍋成史 2003 「考古資料大観」H.生、古墳時代 鉄・金純製品 小学館
山本義孝 2003 「浅羽町内遺跡調査報告書」II 浅羽町教育委員会
鈴木敏則 2004 「有玉古窯」浜松市教育委員会
岩木 貴 2005 「第1節 弥生・古墳時代土器の様相」「元鳥遺跡」II (遺物編) 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
丸山俊一郎ほか 2007 「井通遺跡」本文編 I 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
安藤巧巳 2008 「日本古代鉢器生產の考古学的研究」汲水社
藤沢良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
田村恵太郎ほか 2008 「森町臼田丘陵の古墳群」第1分冊 中日本高速道路株式会社横浜支社 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治 2010 「合代鳥丘陵の古墳群」中日本高速道路株式会社東京支社 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

写 真 図 版



1. 遺跡遠景（北から）

写真図版2

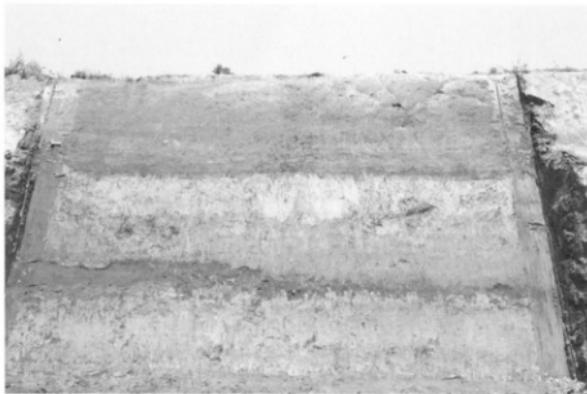


1. 遺跡全景（北から）



2. 出土遺物集合

写真図版3



1. 基本土層（北壁）



2. 基本土層（東壁）

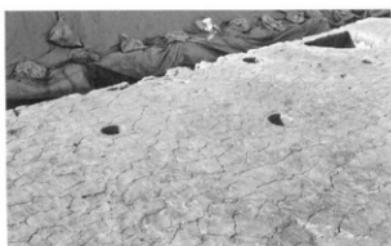


3. 基本土層（南壁）

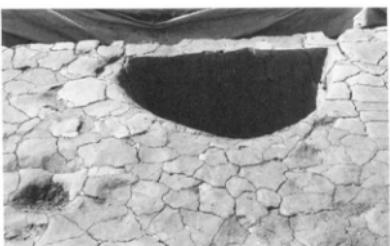
写真図版4



1. 第1造構面調査区全景（南から）



2. 1号掘立柱建物跡完掘状況（南から）



3. 1号土坑完掘状況（東から）



4. 1号土坑遺物出土状況（東から）



5. 2号溝状造構完掘状況（南から）

写真図版5



1. 1号溝状遺構
完掘状況（南から）



2. 1号溝状遺構
遺物出土状況（北から）



3. 3号溝状遺構
完掘状況（南から）

写真図版6



1. 3号溝状遺構
遺物出土状況（1）
(南から)



2. 3号溝状遺構
遺物出土状況（2）
(南から)

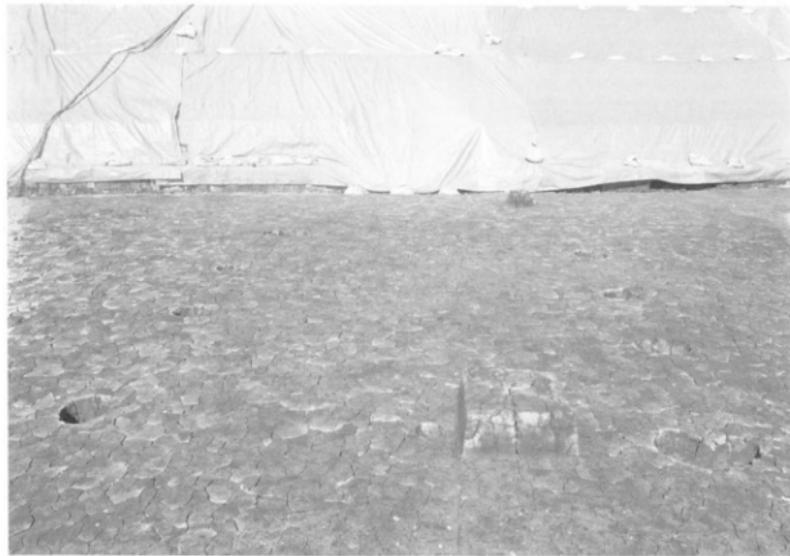


3. 土器集中1検出状況
(南から)

写真図版7



1. 第2発掘面調査区全景（北から）



2. 2・3号掘立柱建物跡完掘状況（西から）

写真図版8



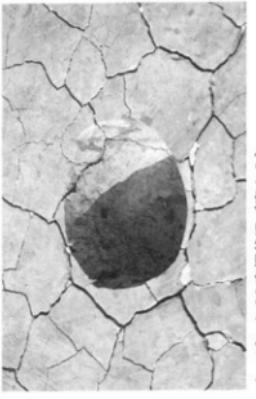
1. 4号掘立柱建物跡完掘状況（北から）



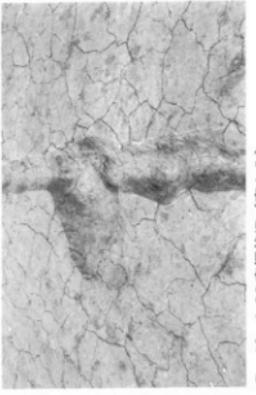
2. ピット14・16～19完掘状況（南東から）



3. ピット21～25完掘状況（南東から）

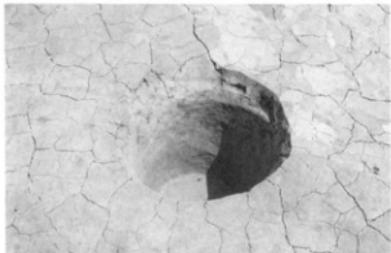


4. ピット28完掘状況（南から）

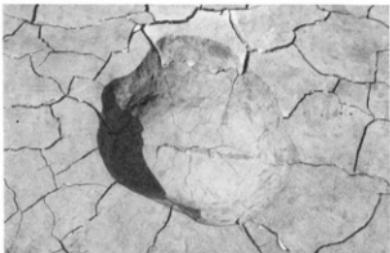


5. ピット20完掘状況（南から）

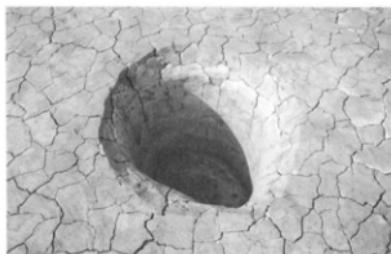
写真図版9



1. 4号土坑完掘状況（南から）



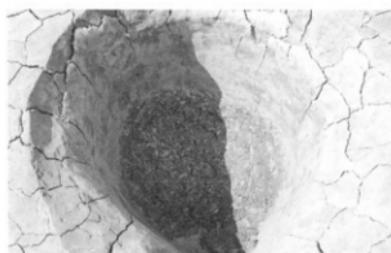
2. 5号土坑完掘状況（南から）



3. 6号土坑完掘状況（南から）



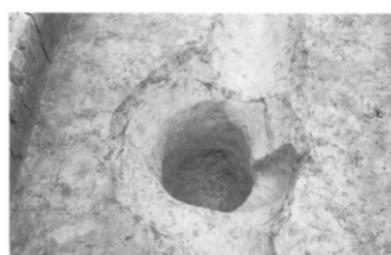
4. 6号土坑遺物出土状況（南から）



5. 6号土坑炭化物検出状況（南から）



6. 7号土坑完掘状況（東から）



7. 8号土坑完掘状況（東から）

写真図版10



1. 12号溝状遺構完掘状況（南から）



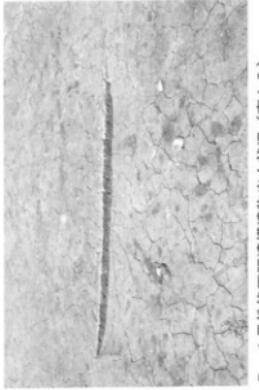
2. 12号溝状遺構遺物出土状況（東から）



3. 20・21号溝状遺構完掘状況（北から）



4. 22号溝状遺構完掘状況（東から）



5. 1号性格不明遺構遺物出土状況（南から）

写真図版11



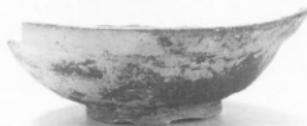
1



5



10



8



17



21



23

1. 出土遺物（1）土器

写真図版12



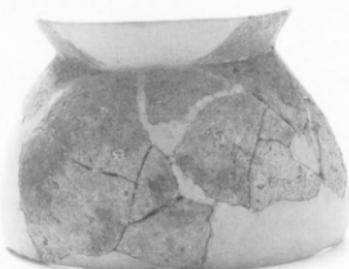
24



30



50



26



51



61



27



63

1. 出土遺物（2）土器

写真図版13



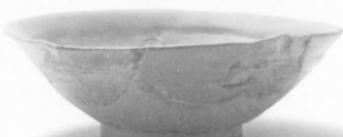
64



65



68



90



93



98



99



133



134



136

1. 出土遺物（3）土器

写真図版14



138



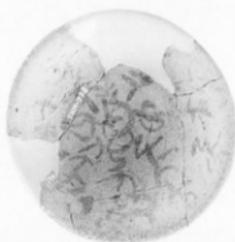
148



149



150



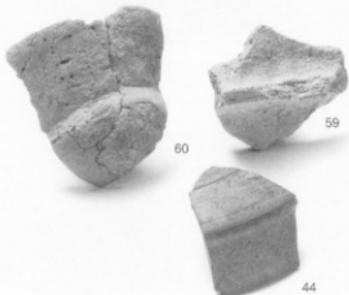
155



153



167



60

59

44



165

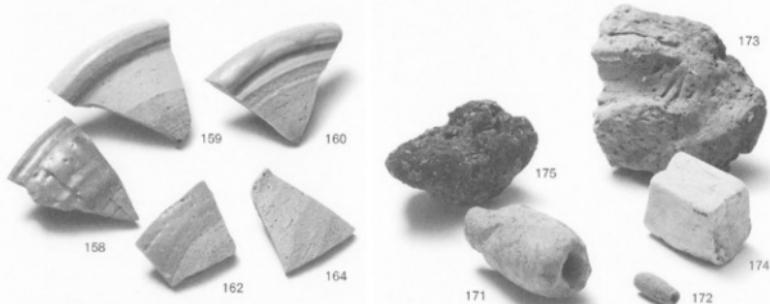
147

156

1. 出土遺物（4）土器・埴輪



1. 出土遺物（5）土器



2. 出土遺物（6）青磁・白磁



3. 出土遺物（7）砥石・鐵滓・羽口



4. 出土遺物（8）SD3出土貝類

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第236集

西向遺跡

平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年2月25日

編集発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹

